
彼の使命は異世界征服

Fake_Age

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の使命は異世界征服

【Nコード】

N6274V

【作者名】

F a k e | A g e

【あらすじ】

死んだ。

なんか金魚に説明されて、神様から「世界征服」の命をつけて異世界に転生することになった。

ついでに与えられたチートな能力で目指せ世界征服！

って感じなストーリー！。

夏休みが余りに暇すぎて書いた。

暇とは言えプロットちゃんと練るほどやる気が出なかったなので現在
＼(^p^)/色々オワタ

流石にマズいから二章(次回更新)までには練ります。

01 | テンプレート（前書き）

警告！ 警告！

この小説は作者が、大学一年目の夏休みがあまりに暇だったため書いたものである。

自動車の教習が開始するまでは一日一回、もしくは三日に二回くらい更新できるような気がするけどたぶん更新は遅い作品である。

文字も詰めてあって見づらいと思われる。

そして作者は書き始めの展開を考えるのがもつとも苦手なので酷く下手くそである。

未だ中二病が完治していない。

以上を読んで大丈夫と思われるかたは本編を読んでいただけると嬉しい。

01 テンプレート

目の前に金魚が浮いていた。いわゆる出目金だろうか、鮮明な赤い身体に大きな黒い瞳が二つ、俺の鼻先に浮かんでいた。全く状況がつかめない。

周りを見渡すと、極々普通の部屋。応接間のように黒いソファーが対面できるように置いてあり、位置的には俺と金魚は向かい合うようにして立って（相手は浮いているわけだが）いる。壁に窓は無く、何も無い純白の壁紙だけが目に入った。

理解が追いつかない戸惑う俺に、金魚は一礼するかように浮く身体を上下させ、語りだした。

「ようこそ、転生支援会社 Goldfishへ」

しわがれた声が、思い出させる。昨晚我が家に届いた手紙のことを――

何でもない日だった。大学のテスト期間も終わり、レポートも済ませていたので本当に暇な日。サークルもロクにやっていなかったし、友達と遊ぶ予定も入っていない。ここまで暇な日というのも久しぶりだなと思いつながら読書をしていた。

週一くらいで本屋で買っていたためか、本棚の量はとてつもない量になっている。小さな部屋の大半を埋める本ならば、一日飽きずに潰すくらいは余裕過ぎる。そんな考えで読み始め、久しぶりに読んだ名作に思わず没頭してしまい、飯も摂らず夜を迎えてしまった。そんな俺を読書の世界から抜け出させたのはチャイムの音。ピンポンといつも通りなるチャイムの音は、部屋の中に余分な音が無かったせいがやけに良く響いた。

しかし独り暮らしのアパートに訪れる来客というのは新聞の勧誘

かセールスと相場が決まっている。俺は面倒なので出ないことにした。ロフトの上でスタンドライトをつけての読書だったので、居留守とバレルる事もない筈だ。

息を潜めて本だけを捲っていると言ったのか、断続的に続いていたチャイムは聞こえなくなった。

それから少し読書を続け、その物語に区切りがつき、そろそろ夕飯にでもするかとロフトから降りてキッチンに入ったところで床に落ちていた封筒に気がついた。宛名は俺、送り主は『転生支援会社 Goldfish』とあった。

金魚（Goldfish）とは随分な趣味しているなと、見るからに怪しい封筒は取り敢えず机の端にでも置いておいて飯を作った。凝った料理を作る気力も湧かなかったので適当なチャーハンにして、テレビを点けて机前に腰かける。

腹が減っていたのもあって、五分ほどで飯は食い終わってしまう。テレビも興味を引かれる番組がなかったので消した。

……ああ、暇だ。今更読書をするという気も起きなかった。そういえば変な封筒があったなと気付き、暇つぶしにはなるだろうかと乱雑に封を切る。

中に入っていた手紙を見て、ますます胡散臭いと思った。

『初めまして、転生支援会社 Goldfish です。』

本日お伺いさせていただいた所留守でしたので、手紙という形での連絡になってしまい残念です。

さて今回連絡しました理由ですが、端的に良いますと貴方様の死亡後、その魂を異世界に転生したいと一人の神様からご依頼されたのです。本来ならば御本人様に直接連絡し、許可をいただくのですが、この度は死亡なされるまでの期間が短いためにやや急ぎでの確認になってしまうことをお詫び申し上げます。

下記にYES/NO形式で確認項目を設けました。死亡後の魂の行方を我が社に委託いただけるのであればYESを、それが無理でしたらNOのほうを丸でお囲みください。』

思わず笑ってしまうくらいの怪しさだった。期待はしていなかったが、せめてまだ怪しい宗教の勧誘ならば面白みがあっただろう。転生などという明らかな夢見事についてのみ語られてもただの悪戯としか思わない。

まあ、こういう手紙がくるのも一興か。俺は適当にYESに丸をつけた。もし、万が一、億が一、本当に転生というものがあつたとして、どうせなら異世界とやらにいつてみたいと思うのは当然だろう。現実をある程度知ってきたからこそ、夢を見なくなる。

結局その日は他に何もなかった。

そして次の日、俺は死んだ。

「——成る程、あの手紙ね」

「お解り頂けたようで何よりです」

金魚から年老いた男の声が聞こえる。余りにも自然すぎるその声と金魚は実にミスマッチで、違和感が拭えない。

「夢じゃないのかね、これ」

「死んだ。という実感はおありなのでしょう？ いえ、昨日の記憶と共に思い出したというべきでしょうか」

その通りだった。昨日を思い浮かべることで今日も思い出していた。

あの日の翌日、朝コンビニに行こうとした俺は、ハンドル操作を誤ったのか駐車場に突っ込んできた車に轢かれた。勢い良く吹っ飛んだ身体はコンビニのガラスを粉々に砕き、血塗れになった。

自分の身体がどんどん冷えていく感覚は今でも思い出せる。視界がぼやけるにつれ身体の奥底から何かが失われていくような喪失感に、ああこれが死なのかと漠然と理解したと思った次の瞬間に俺は此処にいたのだ。

「……死んだもんは仕方ないな。これから俺は何をするんだ？」

死んだにしては冷静な自分に驚いた。

もしかすると死んだ時点で、前の肉体の自分というのは別な存在であると魂のどこかが認識しているのかもしれない。余りにも他人事のように、俺は自分の死を受け止めていた。

「手紙でもお伝えしましたが、異世界の転生ですね。神様の一人が何やら保有する世界でやりたい事があるとのことですよ」

良く分らない。暇な時に見ていたネット小説のような展開なのだろうか。いわゆる俺TUEEって奴なら一度くらいやってみたいが……。俺はまだ少年の心を失っていないようだ。転生という展開に心が躍るのを感じる。

「ああ、俺TUEEという感じになるようですよ。神様からの依頼ですが、『異世界の征服』でして、その目的の為に必要であろう能力は付加する予定ですから」

心を読まれた気がする。まあいい、とにかく今から転生して異世界を征服するのだろう。ところで金魚さん、その能力というのは何がいただけるのだろうか。

「面倒臭がつて口に出さないのは……まあ良いですけど。与えられる能力は『万物改造』だそうです。詳しくは転生した後何と無くわかるそうなので私からはこれ以上説明できません。それと、世界征服に期限は二百年以内だそうです、期限が過ぎるまでに果たせない場合は抹殺するそうです」

成る程、成る程。もういいや、これ以上説明されても面倒臭いし早く転生してくれていいよ。異世界いつて二百年以内に世界征服すれば良いってことはわかったし。俺は正直面倒臭くなった。死んで直ぐにこんな面倒臭い展開はついていけない、早々に独りになって考える時間が欲しい。

「わかりました。ではそのドアを開けてください。そうすれば転生は完了いたします」

「随分と簡単だな」

「我々も正直言いますと、仕事ですので簡単に越したことは無いのです」

そういうものなのだろう。ソファの後ろにあるドア、何の変哲も無い少し高級感のある程度の木のドアだ。開けても普通の廊下が広がっているのではないかと思うドア。俺はそのドアのノブに手を掛けて引く、キィと軋む音と共に開く。そこには光だけが在った。

自分の存在が融けていき、解けていく。

何もない器に入って、そこが水で満たされていくような感覚。これまで一度も経験したことがないようで、しかし二度目であるような気もする。混濁としている。意識はあるが、無意味な思考ばかりしている。何を考えれば良いのか定まらない。次第に身体感覚が戻ってきた。そして目を、開けた。

液体の中に俺は浮かんでいた。

コードや電極が身体に張り付いていて、時折電気が流れるのを感じる。口から酸素は漏れない。この液体は酸素の代わりにもなるらしい。周りに目を向ける。ガラス越しに、眼鏡に白衣の見るからに科学者風の男がいた。

怒りを感じた。

どこから湧きあがってきたのかはわからない。ただ漠然と目の前の男が憎いと思った、親の敵であるかのように、そして殺したいと思った。さんざん痛みつけて殺したい。

「おおまさか成功するとは……ふっ、私は君を創った——」

「そうか、死ねば良い」

殺した。目の前のガラスの構成情報を『万物改造』で鋭利な刃物

に改変し、勢い良く構成されたそれが男の首を切り落とした。痛みを与えて時間をかけて殺そうとしたのに、失敗した。首の無くなった男の身体から血柱が上がる。鮮やかな赤は、ガラスの一部が刃物になったことで俺が入っているカプセルの中から漏れる液体と混じり、紫色になっていく。

殺しに抵抗を感じなかった自分によやく気付いた。気付いた今でも罪悪感は一切感じない。一度死んで倫理観が壊れたのか？この男にだけなのか？ 咄嗟に使ったが『万物改造』とはどういう能力なのだろうか？

どうしよう急展開過ぎる。

整理しよう。今さっき俺は転生した。どうやら何か研究だか実験された何かに転生したようだ。今首と胴体が離れている男が創りだしたらしい。周りの様子を見ると、俺が入っているのと同じようなカプセルが並んでいて、中には形にもならない何かが入っている。

おそらく実験室なのだろうが、情報が少ない。今さっき怒りを感じた理由も全く意味がわからない。何か資料は無いだろうか。俺はその部屋の中を捜しまわった。すると、一つのファイルを見付けたので、さっそく中を見てみる事にする。

タイトルは『人造兵器 F e i - 2 9 8 7 7 8 6 1 』

そして述べられていたのは、胎児を使った人体実験の一つについて。人間のゲノムに魔獣や神獣のゲノム、そして英雄と呼ばれた人々のゲノムを組み込み、書き換えれば最強の兵器が誕生するのではないか。ということについて研究していたらしい。

俺はその第 2 3 0 0 0 2 1 番目らしく、魔獣や神獣のゲノムは魔力特性の部分だけにして肉体は優秀な魔術師や科学者のゲノムを使って創られた固体であるようだ。何と無く理解したがわけがわからない。

魔獣とは？ 神獣とは？

英雄とは？ 魔力特性って何だ？

どうやら非常にファンタジーな世界に来たらしい。それでいてこ

の実験室といい科学も発展している。胎児を使つての遺伝子操作など、現代の技術では確実に不可能だろう。

この研究室だけでは明らかに情報不足だ。唯一の異世界人である博士とかいう男は殺してしまつたし、この研究室には他に誰もいない。パソコンのような情報処理端末も無い。さて、どうしようか。

何もかもわからないがまあ、面倒くさそうなのはわかつた。

01 | テンプレート（後書き）

我ながら中二病ですね。

今回使われた『万物改造』は某鋼の錬金術師の錬金術でも想像すれば良いと思います。

02 | 研究所壊滅（前書き）

一昨日の雷のせいでネットに繋がらなかった。

4000字は書きたいところなんだけど、3000字ちょっとしか書けなかったので反省。

今回話はあまり進まない。

02 | 研究所壊滅

全裸なのは実験体であるとはいえ文明人として如何なものか、と思つた俺は死んだ男から白衣を剥ぎ取つた。普通に服も剥ぎ取れば良いのだが、まずサイズが合わないし成人している男の素肌についてたものなんてごめんである。白衣を着けただけの姿は本来なら変態であるが、どうもこの身体は10歳児くらいであるので子供が親の服を着て背伸びしているようであると信じたい。あとは何か役立ちそうなものだけ男から取っておこう。

さて、取り合えずこの部屋からは出るべきだろう。ここにこれ以上の情報があるようには見えなかったし、何よりも男の遺体の臭いが強烈だ。ここでは落ち着いてもものも考えられない。精神安定のためにも早くでなくては、俺はやたらと広いこの部屋を進んでいった。直ぐに扉を見付けたものの、内側からもロックがかかっているようだ。そういえば、男の遺体のポケットを漁った時にカードキーが出てきたのでそれをリーダーに通すとバシッと空気の抜ける音がして扉が開いた。『万物改造』を使つたほうが早いが、あれは行使に精神力を使うらしく虚脱感に苛まれるので使わなくて良いなら使わないほうが良い。

扉を抜けると、新鮮な空気と如何にも研究所といった廊下が広がっていた。

「こりやまたSFだ」

無機質な廊下、むき出しの銅線に複雑な回路が壁に張り巡らされている。時折電気が進む様は近づきづらい。左右に広がる通路の左を歩いていくことにする。実験室の中に地図の類がなかったのであつてずっぽうになつてしまつが、何処かの部屋で地図も見つかるだろう。

まあそれに、なんだ。こういう研究施設は手当たり次第に殲滅していけば、そのうちボスに辿り着くと相場が決まっている。途中で

服も調達したい。素肌に白衣のみを着た俺は脚を進めるのだった。

帝国魔科学研究所長官は、普段なら余裕に満ちた顔に悲痛な表情を浮かべていた。灰色の髪も乱れ、まだ50歳だというのに老人のように見えるほど焦燥している。これまでに無い事態に彼の精神は大幅に削れているのだ。

およそ一刻ほど前に、部下から監視カメラに第2300021番目『人造兵器Fei-29877861』実験体が映っていたと報告があり、そこからはもう地獄絵図だった。あちこちで爆発音が聞こえ研究所は揺れる。今では中枢のマザーコンピューターが破壊されてしまったために、部屋から出ることすらできない状態。内部通信系統は別回線も存在しているために可能ではあるが、外への回線はマザーコンピューターを介してのものしかないのだ。担当の博士はどうしたのだと思い、部下に確認させれば遺体で発見され、その部下は帰り道に偶然実験体に見つかり殺される始末。

（だが妙だな……）

あの第2300021番の実験体は肉体のスペックはそう高くないものにする博士は言っていた。それで兵器として大丈夫なのかと長官は心配していたのだが、この研究所を壊滅できるならその心配もいらなかったようだなと苦笑する。しかし、魔力特性や魔力だけで壊滅できるほどの研究所はやわではない。魔力を直接放出する、また属性を持たせて放出するということは出来るかもしれないが、術式を知らなければ魔術は扱えない。生まれただである実験体に魔術が使えるわけがないと彼は考えていた。そして大した威力で

はない魔力放出ならば、研究員兼魔術師である部下たちに止められる筈なのだ。

（ならばどうして）

我々は壊滅寸前という今の状況に陥ってしまったのだろうか。またその疑問に至った所で、机の上の通信機に研究所内からの通信を表すランプが点った。

『——今から入りますよっと』

（——ッ）

長官室前の壁に備え付けられた通信機を使ったのだろう。聞き覚えのない少年の声が手元の通信機から発せられると同時に、長官はこの部屋の入口に魔力反応を察知した。

長官は咄嗟に引出しを引き、中から試作段階の魔導兵器を取り出す。研究所の総力を挙げて創り出した一発限りの拳銃型魔導兵器であり、周囲の精霊を強制的に弾とし放つという公表したら精霊信望者たちに殺されかねないものだ。しかしそれだけに威力は強靱な龍の鱗をも貫くと研究員たちが称していたほどだ。実際、下位の龍の鱗は容易く貫いた。これで実験体は殺せるはず、自分にそう言い聞かせる。

長官は、いつでも引き金が引けるようにロックを解除していく。指が震えているのがわかる。だが、気合で抑える。弾は一発であり、外してしまつたらもう後は無い。だが、一発が当たれば倒せる。実験体の運動能力は低い筈であり、魔導兵器を避けることも出来ない筈だ。

パシユツと圧縮空気の抜ける音が聞こえる。指紋認証しないと通り抜けられない扉を、どういうわけか正規の手順で入ってくるらしい。マザーコンピューターが壊れているというのにどういう手段を使って扉を開けたのか。そんな疑問を浮かべる程に高速で回転する頭、ゆつくりと扉が開いていくような感覚。そしてゆつくりと現れる実験体の姿。

小柄な身体、紅い瞳、人形のように整った容姿に、腰まで伸びた

純白の髪。白衣のみに包まれたその姿は、何者の侵入さえも許さない聖域であるかのように思えた。しかし長官に時間は無い。見惚れていた時間は僅か、直ぐに我に返った長官は引き金を引いた。

一瞬で収束する魔力、精霊の悲鳴のような音を立てて、一条の光が線となって実験体を襲う。轟音が鳴り響き、視界が全て白の光に覆われて、時が止まったのような静寂が訪れる。ようやく視力が戻った彼の眼に映ったのは煙。研究体は避ける素振りを見せなかった。やったか、彼はホッとため息をつく。

「——改造指定『床の材料』は『尖った杭』に改変される」

そんな声に前を向くよりも早く。床より伸びる一本の杭が、寸分の狂いなく彼の心臓を貫いた。

割と万能だなあ、『万物改造』って。上手く杭が親玉らしき男の心臓を貫いたのを見ながら、俺はそう思う。

本来の使い方は、改造したいものに直接触れて思考イメージを伝え改造するというもののだが、声の届く範囲ならば触れずとも改造可能なようだ。最初の一撃は焦ったが、咄嗟に白衣に『前方からくる光線無効化』という概念を植え付けることで回避出来た。しかし、こうして咄嗟にした改造は、ものが元の形に戻ろうとするらしく時間がたつと元に戻ってしまう。世界から修正がかかるのかもしれない。

時間をかければ大丈夫ならしいのだが、ものによってその時間が

違ったりと面倒臭い。まあ、後で時間あるときに色々試してみることにしようか。やっとこ、ボス部屋に辿り着けたようだし。親玉男が座っていた椅子に腰かけ、机の上の端末を起動させる。どうも、キーボードらしきものもあるしパソコンのようなものだろう。幸い、実験室でこの世界の文字は読めるということがわかったので（言語補正的なおおがかかっているのだろう）情報を手に入れられる筈だ。指紋認証は扉前でしたように、情報端末を『指紋認証完了して起動する状態』に改造することで、直ぐにログイン出来た。

さて、どんな情報があるのだろうか。

結果、情報はあんまり手に入らなかった。どうやらマザーコンピユーターとやらを介して外の情報を入手する経路ならしく、道中破壊した中にそれが入っていたようで、もともとパソコンの中に保存されていたデータしか見れなかったのだ。その殆どは研究資料。この研究所ではかなりの数の実験が行われていたらしい。

兵器の開発が主なようだ。この研究所だけなのかはわからないが、魔術と科学の融合についての研究が進められていたらしい。まず、魔術なんてものがあるのは驚きなのだが、魔獣とかもいるようなのでここはファンタジーな世界そのものと考えて良いだろう。ゲームのように、魔法と科学が共存する世界か、もっとも魔法があるかはわからないが。

さて、ついにロクな情報が得られないままボスを倒してしまった。取り敢えず研究所からは出るべきだろう。服は疲れるけど『万物改造』で創って、町までたどり着けばおのずと世界について知ることが出来る筈だ。

開いているウィンドウを消し、情報端末を切った。

02 | 研究所壊滅（後書き）

自分で書いてなんだけどつまんねえ。

導入部分が死ぬほど苦手なんですよ……他の人はよく書けるよなあ。

世界征服への活動を始めるのは少し時間かかるかも。

投稿してから気付いたのですが、マザーコンピューター壊れて扉が開けないのに主人公が普通に指紋認証で開いちゃっているという矛盾を書いちゃいました。

今は無理やり修正したのですが、万が一見てしまった方がおりましたら申し訳ありません。

03 | サイクロプス（前書き）

少し説明がわかりづらいかもです。

夜遅くにかいてるので確認不足で文章に矛盾があったら報告していただけると幸いです。

03 | サイクロプス

外に出た。

山しかなかった。

少し高い位置から見ると、一面緑色しか視界に入らない。

「研究所とのギャップが激しいなあ」

確かに非人道的な実験をしていたようだ。山奥にあるのは当然なことだと言える。研究所も地下にあつたらしく、出口は洞窟のようになっていた。だけど、周りに道すらもないというのは如何なものか。研究所には周囲の地図のようなものは無かったので（もしかしたらデータではあったのかもしれないが）適当に進んでいくしかない。

なんとも面倒くさいものだ。地形でも改造しようにも『万物改造』は精神的に疲れる。それに、いまいち何処までの改造が出来るかを把握していない今、試しに使ってみるのは危険だ。山で遭難した場合、精神的な疲れてしまうというのは危険だし、一先ず歩きで散策することにしよう。

「——キャアアアアアッ！！」

とした時、なんかテンプレな展開を想像する悲鳴が聞こえた。これはおそらくの少女が魔物に襲われてるのを助けるという展開なのではないだろうか。しかし、良く考えて欲しい。確かに俺は今『万物改造』という明らかにこの世界においてもチートである能力を持っている。だがしかし、そのチートが戦闘用かと言われるとそうではない。

この能力、自分自身には効かないのだ。例えば今着ている白衣に『着用者の能力を上げる』という改造をした所で、俺の身体能力は

上がらない。他者の身体能力を上げることは出来るのだが、俺自身には関与できないのだ。髪の毛を伸ばしたりは出来るようなので一切聞かないわけではないのだが、ともかく自身の能力強化は出来ない。

武器として木の枝を改造して使うことは可能であるが、物質的に遠いものを改造するとなると難しかったりする。なにより現時点で俺は余りこの能力を把握していないのだ。自身の能力を把握できないのに、誰かを助けるためにその能力を使うのは無謀というものだろう。

ましてや、この身体はどうも十歳相応の身体能力しかないようなのだ。いくら強い装備を持った所で大人にすら勝てまい。以上の理由からして俺はこのまま森の散策を続けるのがベストだ。合理的に出せた結論に満足した俺はなるべく声が聞こえた方向と反対のほうへ歩く。

「——誰か助けて！」

あれ、なんかさっきより声が近付いているような気が……。

“——グルアアアアアアアアアッ！！”

思わず固まってしまうほどの轟音。まず最初に少女が姿を現した。金色の髪をポニーテールにまとめ、金属の鎧に片手剣をもった彼女は、全力でこちらに駆けてくる。そしてその後ろにいる緑の一つ目巨人、ぼろ布を纏って手に持つ棍棒で邪魔な木の枝を吹き飛ばし雄たけびを上げながら少女を追いかけている。

「えっ、ちよっ——」

硬直していた俺の手前で少女が転び、俺の横に砂を削りながら滑りこんできた。そしてそこに振り下ろされる黒い棍棒。大きさに余裕で俺を巻き込むであろう位置、そして一撃で潰されそうな速さ。「巻き添えとか勘弁しろよッ」

割と冷静に焦りながら地面に手を置き『万物改造』を発動させる。一瞬で隆起する地面を巨人の一撃が吹き飛ばしその余波を受けて俺も地面を転がった。くそう、鉄への変化も想像すれば良かった。あ

の一瞬じゃそこまで考えるのは難しかっただろうが。

取り敢えず、手近の木の枝を拾って『万物改造』しておく。時間をかけずに耐久力だけ出来る限り上げた。手に持っているうちはこの耐久力を保てる筈だ。警戒しながら周りを見回す。よし、少女はまだ倒れたままだ。とっとと立ちあがって逃げてしまおう。たぶん少女のほうを殺すのが先だろうから俺は逃げられる筈。

「――ッ」

ところが何故か左足が動かない。ゆっくりと振り返ると俺の脚を掴む少女の手があった。この野郎俺を巻き込む気なのか、離しやがれ――って離れない。見た所2、3年上な少女のほうが力が上だというのか……いちおう、実験体なのにな俺。

「おいこら、離せよ」

「……女の子を置いていくのはどうかと思うのです」

「年下にそれを言う奴もどうかと思う――って」

再度振り上げられた棍棒が振り下ろされる所だった。咄嗟に手を前に突き出して『万物改造』を常時発動する。俺の手に触れた棍棒はくにとやりと折れ曲がった。触れた瞬間から柔らかい何かという曖昧なものに改変してみたのだが、成功したようだ。でもすこし手が腫れた。じんと滲む痛みには俺は涙目になっているんじゃないだろうか。

巨人（以下サイクロプス）は折れ曲がってしまったことに疑問を抱いたのか棍棒を木々に叩きつけている。『万物改造』の効果は既に切れているので木のほうが折れているが、棍棒は曲ったままだ。成る程、物質の性質を変えている時に曲げたりすると効果が切れてもそのままなのか。また一つ能力について知れた。

「早く逃げるべきだよねこれ」

「足をくじきました。おぶってください」

なんだこの女。わかった、わかったから足離せ。もしもの時に囹として使えるし連れて行ってやる。女を背負う際にその服に体重軽減の概念を付着させる。これでなんとか俺でも背負ったまま走れる

だろう。サイクロプスがこちらに来る前に本気で走った。木もいっぱいあるし、ある程度距離を離せば撒ける……と良いね。

希望的観測のもと俺は森を駆ける。十歳の身体では大した速度も出ないので、曲りまくってサイクロプスの視界に入らないように注意を払って走り続けた。

「——ふう、ようやく撒けた」

どれだけ走っただろうか。何とか撒けたようだが体力的には限界だ。息が荒いし、心臓がドクドクと激しく動いている。適当な場所に少女を降ろすと、近くの木に寄りかかって座り込む。

「で、あんた誰？　なんで見るからに弱そうなのに何であんな怪物のいる危ない森に来たんだ？」

「いちおうギルドランクDなんですけど……仲間がいたんですがはぐれました。そしてこの帝国一危険と言われる森に白衣だけにいる貴方のほうが論外です」

ギルドランクって何ぞ……。しかし此处で知らないと言うと怪しまれそうだから話は合わせておこう。

「白衣は仕方ない、並々ならぬ事情があるんだよ。てか、ランクDでもこの森は危なくないか？」

「克蘭のランクはBで、何人かAランクもいるので大丈夫な筈だったのです……」

「けど、はぐれちゃったと」

うん、良かった。一番危険って言うくらいだからDじゃ危ないよね。間違えてなくて良かった。良く分からないけど克蘭っていう冒険者グループみたいなものがあって、新入りの実地訓練でもやっていたのだろうか。と推察してみる。しかしそれだとこの森を無事抜けられるのか不安になってくる所である。俺一人ではあのサイクロプスですらギリギリ倒せるかどうかだろうし、ギルドランクとしたらCが精々だろう。

「それで、仲間に合流するまで一緒に行動してくれないですか？」

「負傷した女と行動共にするほどの余裕はねーんだけど」

俺は能力を最大限使えばある程度は危険なく逃げられると思う。しかしこの女と行動を共にした場合、能力を大っぴらに使うのは不味いだろうし、何より俺の体力が保たない。一人のほうが安全なのに、二人で行動するような阿呆はどこぞの主人公でもやるような奴だけだ。俺は安全に生きていきたい一市民なので、損しないような事は極力避けたい。

「私は貴族です。無事合流できたらそれ相応の報酬は与えます」

ふふんと偉そうに無い胸を張る金髪少女。へえ貴族制度もあるのか。うーん、ここは協力したほうが良いかもしれない。確かにデメリットは多いが、この森を脱出した後は貴族のあてがあるのなら有利だ。協力はするとして、後はこの少女から聞き出せることは聞いておきたい。

「でも俺口クな力ないしー」

「冗談を。『魔法』を使えるのでしょうか？」

「魔法？」

「とぼけるのですか、動媒体も術式構成も無しに棍棒の硬度を変えていたじゃないですか」

「ごめん良く分かんない。発動媒体と術式とやらを使ったのだ魔術で、使わないのが魔法ってことなのか？ 能力はエフェクトも何もないから魔法と勘違いしたってところか。で、魔法が使えるのは珍しいと。これだけ証拠があつてまだ誤魔化すのですか？ とでも言うような少女の目が痛い。仕方ない、魔法が使えるって嘘を吐いておこつ。

「あいあい、実は『硬度変化』の魔法が使えるんだ」

「『硬度変化』、ですか……そんな魔法使える人がいたら話題になりそうですが帝国じゃそんな家系も聞きませんし、貴方帝国国民じゃありませんね？」

え、魔法って家系で相続するものなの？ しかも帝国民じゃない

って断定されたし、合ってるけど。心の準備無しに次々と明らかになる情報に俺の頭は少し混乱してきた。というか女、問い詰めたい気持ちはわかるが息がかかる程近づくんじゃないよ暑苦しい。

「おーけー協力するよ。だからこれ以上の詮索はするな」

「……わかりました」

どうも不服そうだが引き下がった。しかし協力ねえ、どうせ俺が仲間とやらと同流するまで背負うことになるいのだろう。また体重軽減に改造する精神的負担と森を歩く肉体的負担のダブルコンボかと思うと、思わず重い溜め息が口を吐いて出る。

「——あ」

そんな時、少女が驚いたように目を見開いて声を漏らした。

「ん？　どうかし——ッ」

ってこれはたぶんサイクロプスの再登場フラグってやつでは。咄嗟に自分と少女を囲むように周りの土を『万物改造』で弄る。今回はギリギリ表面を鉄に改変することも出来た。そして改造が終わった瞬間、ガンツと鈍い音と共に地面が揺れる。マジ手加減してください。直ぐに二回目の衝撃が俺たちを襲い、それと同時に改造の効果が切れ覆っていた砂が地面に還る。

うえー、これはちよつと不味いかもしれんね。俺の視界には、予想通り徐々に晴れていく砂煙の中に佇むサイクロプスが——二体。どういうわけか、仲間を呼んでいたらしい。一匹は曲った棍棒を持っているので同一固体なのだろうが、どうしてこうなった。こうなったらなんとか能力で仕留めるしかないかもしれんね。

「おい女、剣を振るうくらいは出来るか？」

「歩いてなら立ちあがれます」

「おっけえ、ちよつとその剣貸せ」

少女から剣を受け取る。無駄な装飾のないシンプルな片手剣だ。子供でも多少重いが持てるくらいの中々に質の良さそうな代物。これを『万物改造』で改造すれば少女でもサイクロプスが倒せる……と良いな。

俺が棍棒を曲げたのもあり、サイクロプスは少し警戒しているらしく手は出してこない。とは言え、それも後少しだろう。痺れを切らして襲いかかってくるまでにどうにかしなければならぬ。

少女から渡された剣を握る手に汗が滲むのを感じる。サイクロプスを屠る時間効果が持てば良い。その時間だけでも良いからこの剣を最強に改造してやる——十秒も立たずにサイクロプスが、前逢ったほっじゃない奴が此方に棍棒を振りかぶりながら突っ込んできた。棍棒が曲ったのを体験してないから高をくくってるのだろう。このままでは改造が間に合わない。

「くっ、——改造指定『迫る棍棒』は『柔らかい粘土』に改変される」

能力発動。そして迫る棍棒を改造途中の剣で迎え撃つ——僅かな抵抗があり、棍棒は綺麗に二つに裂けた。ああくそ、動く物体対象だと精神力一氣に持つてかれるなやっぱり。背後の少女が驚いたように息を飲むのが聞こえるが気を払っている暇はない。驚いている隙に剣を——

「——がハッ」

鈍い衝撃が俺の腹を打つ。どうやら棍棒は捨てて生身で挑むことにしたらしい。曲った棍棒を持ったほうもそう考えたのか、棍棒は地面に投げ捨てる。不味い、これは不味い。俺の『万物改造』は睡眠や気絶していない生物に使うと精神力をかなり使う。能力をフルに使い、一匹倒したところで俺の脳は限界を迎えてしまうだろう。

思考を巡らす間にも、サイクロプスたちは俺たちに迫ってくる。どうするどうする！？ 何か良い手は——ッ。

03 | サイクロプス（後書き）

ああ、眠い。

明日仮免の筆記試験があるのにいたい俺は何をやっているのだ…。

あと主人公の能力の『万物改造』ですが、なんか良いルビありませんかね？

ばんぶつかいぞうだと何か締まらないですよ、カタカナで何か格好良いのを当てたい。何か案がありましたら提供していただけますと幸いです。

04 | 牢屋と脱獄（前書き）

自動車仮免許試験があつたので遅れました。
急いで書いたので文章荒れてたらすみません。

04 | 牢屋と脱獄

——ッ、時間が無い。悩んでいたら直ぐにサイクロプスは此方にくる。とにかく足止めをしてやる。

「——改造指定『地面の土』を『鉄の鎖に』改変」

サイクロプスの足を囲むように盛り上がった土が、鎖の形になり縛りつけるように固まり、鈍い銀色に変化した。歩行中だったサイクロプスたちはそれに足を取られ、轟音と共に前倒しになる。能力もそこまですが限界だったらしく効果は切れ、鎖はただの土の塊になった。

能力の行使により頭痛が走る。実際そこまですが自分の限界なのかを把握していない今、いつ限界が来てもおかしくはない。剣への能力行使はもう少しで終わりそうだ。しかしサイクロプスは既に起き上がろうとしている。今はチートな能力を持っていたとしても、元一般人に過ぎない俺のメンタル面は大したことはない。正直怖いです。失禁しそうだ。

そんな事を考えているうちに立ちあがっていたサイクロプスたちは、雄叫びを上げながら襲いかかってきている。砂煙を立てながら此方に近づいてきて、太い腕を振りかぶる——直前、剣が完成。少女に渡す時間が無いのは明らかであった。転生してからやけに回る頭を使っただけで対処法を捻り出す。

——結論、『万能改造』を使用。

脳による身体のリミッターを解除、いわゆる火事場の馬鹿力、筋肉が千切れる嫌な感覚に耐えながら振り抜き、それは一匹をの心臓を貫くに足る斬撃となった。どうも自分の身体でもあり得ることは改造可能であるらしい。賭けだったが、成功だ。サイクロプスの身体は数回痙攣すると、力なく地面に倒れこんだ。俺も身体に激痛が走り、もう殆ど身体は動かなくなる。そしてサイクロプスの脚に倒

れかかる。身体中が痛い、能力による回復は出来ない可能性が高いし、仮に出来た所で今精神力を使うべきではない。

「大丈夫です？」

「そう見えるなら医者にも診てもらいな——まあ、隙は作るから後は任せるよ」

色々と。

少女に剣を渡し、仲間を殺され大きく雄叫びを上げるサイクロプスを見据える。明らかに、怒っている。仲間を殺されたのだから当たり前なのかもしれないが、それにしただけで自業自得だろうよ。いや、少女が先に手を出した場合は違うが——まあ余計な思考だな。しかし、肉を斬る感触は嫌なものだった。なんて、変な事を考える暇は無いんだった。

今もう既に精神力がギリギリだという事は直感で理解していた。身体が限界を告げていた。だがそれが何だと言っただ。精神力なのだ、俺にまだ意識があるなら尽きてはいない筈だろう。限界まで使う、あのサイクロプスの動きを一瞬でも止められれば良い。足じゃ駄目だ。既に警戒されているだろうし、この距離なら上半身だけでも届く。

自分が直接手をついている『地面』を、サイクロプスの身体を縛る『鉄のワイヤー』に改造——凄まじい勢いで伸びたワイヤーがまるで意志を持っているかのようにサイクロプスの身体をがんじがらめにする。そして都合よく（そう思い描いたからだ）腹の部分にはワイヤーが無い。少女はまだ足が痛むのか余り早くは無い速さでサイクロプスに近づくと、剣を正眼に構えた。

その構えは実に慣れた感じで、様になっていた。こんな状況じゃなかったら見とれてしまうかもしれない。そして彼女は一息、深く息を吸って吐いた。そして次の瞬間、サイクロプスの腹に銀の線が描かれると同時にワイヤーの改造の効果が切れ、二つにさけた身体は地面に音を立てて落ちた。ギルドランクDある云々と言っていたが、中々の実力はあるらしい。少女は自分の剣の切れ味に呆然とし

ていたが、剣への能力も限界を迎えたのか——無理な改造だったのかは分からないが、端から徐々に輝が入っていき、ビキンツと鈍い音を立てると粉々になってしまった。あれだけ頑張って改造したものが壊れるのは悲しいものである。

——そこで、視界は黒に染まった。

——目を覚ますと、そこには見知らぬ天井があった。

某アニメの有名な台詞でも言おうと思ったが、自重することにす。さて現状を把握しよう。と言っても十中八九、あの少女の仲間拾われたという展開だろうし、そうであることが最善であるわけだが。どうだろうか、視界に入る石の天井だけでは余り情報が得られそうにないので身体を起こして周りを見渡す。

.....。

あれ？　ここ牢屋じゃね？

結構予想外の状況だった。右を見ると石の壁に、鉄格子のついた小さな窓。左を見ると、如何にも牢屋らしい鉄格子。前を見ると石で出来たトイレのような何か、そして俺が寝ていたのは簡素で質素な感じの余り寝心地の良くないベッド。

「これ明らかに捕まってるよね俺」

「その通りだ小僧」

思わず出た呟きに返答があつたので声のほうを向く。そこにはおそらく30代半ばの少しひげを生やして鎧を着ているおっさんがいた。看守だろうか。汚いものを見るような目で此方を見てきているが、一体全体俺が何をしたって言うんだ。

「すみません、何で捕まっているんですかね俺」

「貴様には帝国の研究所を壊滅した疑いがかけられている」

あちゃー、それ俺だわ。明らかに非人道的だったし非公式だろう

から捕まらないと高をくくっていたけど、まさか普通に捕まるとは。逃げ出した研究員が伝えたのだろう。少女を助けたのにこの仕打ち、まったく人生というのはままならぬものである。

「えっと、俺で犯人は確定しそうなのですか？」

「だろうな。小僧がやったと研究所から逃げ出した研究員が既に証言済みだし、証拠の映像もある」

「はっはー、そうですか」

実に納得がいかない話だ。よもやファンタジーの世界で映像なんていう証拠を持ち出されるとは……。第一、俺も犠牲者だつて犠牲者。あの研究所にいたら絶対変な実験とかやらされていた筈だ。それを逃げるためにはしょうがないことだったんだよ。なんて言ったところで犯罪者には変わりないだろう。俺は溜め息を吐いた。

「それで、刑はいつどのようなものが執行されるのでしょうか？」

「それを伝えに来たのだ。貴様が犯人だと評議会が結論付け次第、直ぐにでも死刑執行予定だ。おそらく明日になるだろう」

「ははは、……あー」

何この絶体絶命な状況。よし、脱獄しよう。

夜が更けるまではずっと部屋の隅で死刑におびえる死刑囚を演じて、夜になったら見張りが少ないであろう時期を見計らって、俺はその牢屋から脱出した。くそう、俺を牢屋にぶち込みやがった名も知らぬランクDの少女め……次会ったら覚えときやがれ！

さて、どうしようか。

俺が入っていた刑務所はどうやら帝国の王都にあるらしい。脱出に成功した後、近場をひっそりを息を潜めながら徘徊していると明らかに街の城のような建物が見つかったのだ。それに映像があるくらいだし、研究所もあれだけ機械だらけだったのでつきり文化レベル自体が高いのかと思っただろうでもないようだ。人は見かけないが、立ち並ぶ民家や店などはゲームなどでよくある平凡な造りな

ようだ。石で出来た建物や、レンガ造りの建物などが多いように思う。あの研究所が異常だったのか？ 良く情報を集めてからでないと、容易に判断するのは危険だ。

ともかく、街の景観はよくあるファンタジーな話そのままだった。そして何よりもそこら中に張られた緊急指名手配の紙……明らかに俺の顔が書かれている。映像はあるのに写真はないらしく、特徴と共に書かれているのだが、アルビノの子供なんて俺以外いないだろう。俺が脱獄して直ぐに張られたとは考えられないので、まだ剥がしてないだけだろうが……。とにかく何とかして髪の色を変えなくては、『万物改造』では髪の色は変更できないのだ。髪の色を変更するまで街にいるのは危険だし、一度外に出て髪の色を変えてくる必要があるそうだ。

しかし、髪の色が伸ばせるのに色の変化が出来ないとか、つくづく使い勝手の悪い能力である。誰だ俺TUEEEできるとか言った奴。能力自体はチートなのにも関わらず一人で好き勝手は余り出来ない。ふむ、どっかで手頃な人間か魔獣を時間をかけてじっくり洗脳&改造して配下にするのが良さげだな。そして少数じゃ不安だから徐々に数を増やして——成る程、世界征服への布石のために能力に制限があるのか。確かにこの能力なら組織をつくることで好き勝手できるようになるだろう。俺TUEEEというよりは俺が改造した部下TUEEEになりそうだけど。

納得しながらも、このままでは口々に生活できない。その事実だけがついて回る。やっぱり無理してでも強い装備を創っておくべきなのかもしれない。元となる武器があれば良いのだが……研究所の銃みたいなのを取っておくべきだったか……。まあ、木の枝からでも作れないわけではないだろう。木の枝を剣にして尚且つ強い力を入れるとなると精神力が持たないだろうけども、特殊な能力を持つ木の枝とかにならなんとか出来る筈だ。小さな金だったら石とかを改造すれば創れるだろう。でも強い武器を持ったとしても質量で責められたら負ける気がしてならない。能力の可能範囲を検証する必要

性を再認識した。

でもこうやって考察するほど、研究者とかに向いている気がする。時間をかけてじっくりとやれば理論上どんなものでも作り出せるのは事実なわけだし。ま、深く考えても仕方ない。幸い、この世界の魔術や魔法といったものを扱うのに必要であろう魔力はあるのだし、どっかにひっそりと暮らせるだけの環境を手に入れさえすれば色々と上手くいくはずだ。

思考している間にも足を進めていた俺は、街の外壁に辿り着いていた。何やら鉄を使っている様子、俺は能力を発動させると壁に子供が通れるくらいの穴を開け、外にでる。月光で照らされる異世界の草原、ふと空をみると満点の星空。月は一つだった。遠くからは獣の声が響いている。

…… 先ずは髪の毛の色を変えよう。そしたら直ぐに街に戻ってこないと俺死にそう。近くに水場があれば水を改造して髪の毛を変えられる筈さ。出来ると良いね。先ず近くに水場があるかどうかさえ定かじゃないけど——なんとも、世知辛い世の中だな。そういえば、目が覚めてから何も口にしていない気がする。牢屋では何も出してくれなかったし。意識すると空腹感が酷くなってきた。

俺、髪染めて戻ってこれたら王都の飯屋で腹一杯食べるんだ……。

04 | 牢屋と脱獄（後書き）

たぶん平気だと思うんですが、小説内で矛盾していることがあったら指摘して頂けると幸いです。

正直、この小説はロクなプロットも十分な設定も練られておりません。

ただ書きたい展開があるがために書いております。そのため世界観がしばらく明らかにされなかったり、能力についての完璧な説明は余りでてこなそうです。

『主人公の認識であつた』という一人称であるが故の矛盾誤魔化しをするかもしれませんがご了承ください。なるべく早く設定を固めたいと思います。

05 | 初めての下僕

川があつた。水源の確保のために街の位置を川の側にしていたのだろう。俺が出た場所から反対の位置にあつたが……転生の際に不幸補正でもついたのだろうか。そんな嫌な予感がしたが、おそらく気のせいだろう。気のせいであつて欲しい。まあ、取り敢えず髪の毛を染めるとしよう。

川に手を入れる。夜ということもあるのだろうけど、酷く冷たかつた。『万物改造』に必要なのはイメージ、髪の毛を染める染料を想像する。実物を見たことが無いから明確にイメージは出来ないけど、髪の毛に付着して色を持つものを想像すれば何とかなるだろう。というわけで直ぐに試してみた。川の中に頭を入れて、髪の毛に色が付着していくようなイメージで水を改造していく。毎度思うが、改造というよりは改変という言葉のほうが似合うのではないかと思わなくもない。五分ほどそうしてから、顔をあげる。染まつたかは見ないと分からないので、水を手に掬つて『良く姿の映る水』に改造する。揺らさないように気を付けて顔を近づけると、そこには黒髪の美少年がいた。なんてな、まあ実際研究所の鏡で確認した時には誰だこれ？ と思つたものである。

取り敢えず髪を染めるのは成功したらしい、俺は安堵の息を吐く。瞳の色は……カラコンでも作れば可能な気もするが、髪の色さえ違ふならわざわざ確認する人も少ないだろう。ともかく、この色で固定する事にする。改造した水が、元の水に戻らないようにするにはかなりの精神力が必要だ。

正直、精神力は漠然として何なのだからイマイチ良くわからないのだが、何と無くその部分に集中していると精神力が集まつていく。髪の毛を覆うようにその何かを集めて、定着するように念じる。ものによつて定着に必要な量が決まっているのだが、どれぐらい必

要かというのもフィーリングだ。改造というと科学的な気もするのだが、なんとも人の感覚頼りな能力である。そうこう考えている間に改造の定着は完了した。

「さてと、王都に侵入しようか……待てよ？　俺この格好のままだと変態じゃねーか」

そう言えば、まだ裸白衣のままだった。あの刑務所、囚人服とか着せてくれなかったんだよな。まさか裸白衣の少年に興奮していたのではなからうな、俺は少し恐怖を抱いた。しかし白衣からとなるとかなり薄手の半そで半ズボンくらいしか作れないな。『万物改造』で質量保存の法則を無視、ということも出来るが、如何せんだのくらい精神力を使うかわからんし、かなり多く消費することだけは確かだ。半そで半ズボンの上下だけなら白衣の布の形を変えるだけであるので、そこまで精神力を消費しないだろう。

形を変え、定着させる。うん、文明人になった気分だ。今は真っ白で目立つだろうけど、街に着くまでに汚れるのでちょうど良いはず。しかし、今日は牢屋の壁、街の壁、水、白衣と改造してきたけど、精神的な疲れはそうない気がする。昨日も研究所壊滅にサイクロプスとの戦闘と、かなり能力を使えたことから考えると、この身体になって精神力というものがかなり高くなっているような気がするな。一度死を体験したからか、転生の影響なのか、身体に引きずられているのかはわからないが、殺しに大した抵抗を感じ無かったりと色々変わった気がする。

さて、服も着たし日が昇る前に街に戻るとするか。街の門や周りには灯りが見えるのだが、今俺がいるところは暗い。この身体は夜目が聞くのと、月の光でそこその明るさはあるにしろ、そう長いのはしたくない。一度空の月を見てから、俺は街へと歩き出した。

そしてエンカウント。

野犬A、野犬B、野犬Cが現れた。

コマンド↓逃げる。

しかし回り込まれてしまった。

どうやら逃げられないようだ。茶色い毛の犬、なんとなく狼ではない気がする。見た所本当に、ただの犬だ。魔物……とは違うのか？　まず動物と魔物や魔獣の違いがわからん。ともかく、唸り声をあげてこちらを睨む犬三匹の目にはあからさまな敵意が見える。殺意と言っても良いかもしれない。友好的でないのは明らかである。

確かに、幼いこどもが一人でいるとなれば絶好の獲物だろう。俺が普通のこどもだったら終わりだ。しかし、『万物改造』というチートな能力を持っている以上そう脅威は感じない。あのサイクロプスだって、研究所で精神力を消費していなければ勝てなくはなかったはずだ。ただの野犬がサイクロプスより強いということは先ずないだろう。勿論、今回は三匹であるために油断は出来ない。群れがこの近くを縄張りに行っている可能性がなくもない。時間はかけず、仲間を呼ばせず、直ぐに仕留める。

「——改造指定『草』を『野犬に撒きつく蔓』に改変」

凄まじい勢いで草が伸び、野犬たちをぐるぐる巻きにしていって。最初に喉をキツク絞める想像をしていたので、仲間を呼ばれることもないだろう。キツク縛りあげられた野犬たちは苦しそうにもがくが、蔓は剥がせない。『野犬に撒きつく蔓』なのだから延々と撒きつき続けるのだ。このまま窒息死させてしまうか……？　いや、そうだな。将来のためにためしておきたいことがある。俺は気絶するまで締め上げるように改造を加えた。

間もなく、野犬が気絶したらしいのを近づいて確かめると、『万物改造』の効果を切る。するりと蔓がほどけ、野犬たちが解放された。かれはその野犬たちを引きずって一カ所に集める。そして三匹の額に触れて、『万物改造』の能力を発動する。

融合指定『野犬A』『野犬B』『野犬C』——各臓器の融合、不具合の補正——外皮の融合、血管の結合——各脳に主人を設定——各思考による身体制御をプログラム——体毛の色変更『黒』——爪

及び牙の密度向上——魔臓を融合強化——属性『火』を『炎』に強化——全行程ロード——書き込み——融合改造完了。

「——ッ」

『万物改造』による融合改造と洗脳。完了したと同時に身体中から汗が噴き出る。ここまで疲れるものだとは思ってもよらなかった。しかしどうやら上手くいったようだ。さっきまで三匹重なっていた所にはちょうど二倍ほどの大きさの三頭の犬——ケルベロス（命名：俺）がいた。茶色の毛も今では黒、爪や牙も密度をあげたせいか鋭く見える。これで、下僕1の獲得だ。

概念の植え付けをすれば簡単に強化できそうではあったが、あれはどうも……。白衣に植え付けた時は直ぐに出来たのだが、森で剣に植え付けた時は時間がかかった。それに白衣の時は光線、剣の時はサイクロプスと概念の対象が少なければ精神力の消費はそこまでではないが、凡庸性のある概念の場合はどれだけ消費するかわからないし、定着させるとなるとかなり食うだろうから概念の植え付けを今回はしないことにしたのだ。後でこいつで試すことにしよう。

そして改造過程の中に魔臓やら属性があったが……。まあ、そういうことは街で調べるか。ケルベロスはふらりと立ちあがった。こちらを見るとお座りの体制で命令を待つように大気している。大人の身長くらいある体躯は中々に迫力があり、強そうである。とは言っても、結局のところそこまでの強さがあるかはわからないのだが。

「俺が街から出るまではこの草原で待機、目撃者は可能な限り殺しちゃって良い」

そう言つと、了解と言うように一鳴きして草原を駆けていく。巨体が走っていく様は凄まじい。程無くして、その身体は暗い夜の闇に融けていった。俺もそろそろ街に入るとするか。俺は再び街へと歩き始めた。

四方向にある門の死角から、見回りの兵士（行きは運よく出くわ

さなかつたが、が通り過ぎたのを確認して壁に穴を開けて王都へと侵入する。ふう、達成感があるな。そして相変わらず人はいない。今何時なのだろうか？ 4時とかになれば商人とか老人とかは起きだすような気がするのだが、人がいないとなると2時くらいなのか。しかし、人に会わないというのは中々に寂しいものである。

「……ん？」

なんか視界の隅で影が動いた気がする。人だろうか？ 何と無く危険な香りもするが、やることもないのでついていくことにしよう。俺は細心の注意を払って音を立てずに影を追う。この身体になってから、身体能力は高くないにしろ身体の使い方が上手くなった気がする。抜き足差し足なんて朝飯前だぜ。

そんなこんなで追っていくと、商店街のように両脇に店が立ち並び通りを駆け抜けて、路地裏に入って行った。怪しい、実に怪しい。街灯で一瞬見えた姿は黒いローブに包まれていて、見るからに私怪しいですよと主張しているようだった。そして路地裏を奥へ奥へと進むと、空き家らしき家に入ってしまった。その住人では無いようだ。階段をあがる音も聞こえず、灯りを点ける様子もなく、ガタンツという音が二度ほどただけで後は静寂しかなかった。地下に何か非合法な取引所でもあるのかな？

ありがちだけど非合法で、奴隷とか売ってるんだろうか。なんて妄想が進む。ファンタジーな話ではわりと出てくる奴隷。転生する前も一人くらい欲しいと思ったものだ。まあ麻薬とか非合法なものを買いに行っているのかもしれないし、乗り込むのならばそれなりの金は持っておいたほうが良い気がする。仮に奴隷とか売っているなら捕まえられて売られるかもしれないね。客として扱ってもらうには金が無ければ始まらない。

しかし、硬貨はまだ見ていないので価値のありそうなもの……宝石なんかが良いかもしれない。路地裏に転がっている石を拾って、『万物改造』、成分の変質はそこまで精神力も消費せずに改造できた。ルビーやサファイア、翡翠など有名どころをいくつか創って、

改造を定着させる。それとこの半そで半ズボンは逆に目立ちそうなので、男が着ていたようなローブに改造、色も黒に変えておく。裸に黒ローブ、レンチコートとかだったら露出狂のようだ。早く普通の服が欲しいと切に願う俺であった。

さて、おおよその準備は出来た。何か言われても宝石でも賄賂として渡せば貴族の坊ちゃんとも思われる筈だ。あのDランク少女も貴族ならしいし、貴族は存在するようだから問題はあるまい。ただ、実はただの犯罪組織という場合も考えられる。まあ、その時はその時だ。なに、きつと大丈夫。室内での『万物改造』は最強だ。――変なフラグを立てていないことを祈りながら、俺は空き家に入っていた。

05 | 初めての下僕（後書き）

教習がつ、教習がつ！！

明日（もう今日ですが）なんて12時間近く教習上に缶詰状態ですよ。本当にやってられないです。

それと、今回の話作るに辺り第二話の白衣に植え付けた概念を『前方からくるものによる影響全て無効』から『前方からくる光線無効化』に変更しました。

今回から若干世界征服へと進んでいきます。

次話は作者の趣味が全開になるような気がします。

そして、毎回深夜に更新することが多いのですが……もしかして午後に更新したほうがPVとか伸びるんですかね？

まあお気に入り数気にするよりも自分が好きなように書いたほうが良いんだろうとは思ってますけどね。

次回は……、まあ最低でもこの四日に一度は崩しません。

日曜は教習休みなので、出来たら日曜には更新したいなあと思います。

06 | 初めての奴隷（前書き）

更新遅れました。

06 | 初めての奴隷

そこは地下の非合法取引場。人の欲望渦巻く世界の闇とでもいべき場所だ。——と、変なナレーションを試みるテスト。あの空き家に入って見るからに怪しい鹿の剥製の角を引いたら暖炉に秘密の階段が現れ、難なく地下への通路を発見した俺は先へと進んだ。やたら長い螺旋階段、もうエレベーターが欲しいと思いつながらも必死で降り、怪しげな門の前で歩みを止めた。そこで門番に通行料を支払い、開いた門の先に広がる地下の空間。どこか日本の地下街を思わせる無機質な、しかし明るく賑やかな空間に俺は圧倒されるのであった。まる。

周りを見ると、身なりの良い人が多いように思う。スーツ姿だったり使用人らしき人を連れていたりする。子供もいるが、やはり貴族なのだろうか？ 中には商人のような人もいるので、裕福な人々がここに集まっているのだろう。石を積んで出来ている建物は地上の商店街と余り変わりは見られないのだが、地下の天井にある人工太陽のようなものの灯りが仄かに青いせいか、何と無く暗い雰囲気漂っていた。天井が煉瓦のような石で出来ていて茶褐色なものもそれに一役買っているだろう。

娼館のような女が身体を売る場が多くあるようで、その誘いの声は大きいので全体をみると雰囲気は決して暗くはないのだが……どこか暗い気がしてしまうのは俺の気持ちの持ち様なのかもしれない。しかし、10歳の子供にまで声をかけるのは如何なものか。早いと10歳でも精通があるらしいけど、普通ないだろう。まさか異世界は精通が早いとかあるんだろうかと疑問に思った。

そんな地下のように圧倒されながらも、俺は店を探しに行く。興味があるのは武器と奴隷、魔術関連でも本や道具があるようならば買っておきたい。そう言えば、不思議と文字は読めるんだよね。研究所の時は理解できることを深く考えなかったが、使われている言

語は日本語ではないようだ。まあ、理解できて使えるんだからいいや。異世界補正にいちいち突っ込んでいたらキリがないしな。あ、服も欲しい。そう思って周りを見渡すが、中々良い店はない。小さな露天みたいな店ばかりだ。俺としてはもっと大きな店が良いのだが――お、なんか良さそうな店発見。

先ず、大きさからして違った。普通の店五個分くらいのスペースを陣取っている。そして店の前に首輪を着けた人々――つまりは奴隷が並んでいる。こちら辺では一番の奴隷売りつて所か。店の前にいる奴隷は、正直言つて心惹かれるようなものはいなかった。不細工な女か、貧弱そうな男しかない。中には蜥蜴みたいな奴とか動物の耳付いてるやつとかがいるが……亜人とかそんな感じが、定番だな。どうも処分品セールみたいなものをやっているらしい。これで売れなければ処分するんだろう。本当に人間らしい扱いを受けていない。

何にせよ、表には目ばしい奴隷はいなかったので中に入る。木製の扉を開けて見えた店内には、表にいた奴隷たちよりまともそうなものが名札のついた檻の中にいた。一部の奴隷はうるさく出せなどと言っていたが、殆どの奴隷は全てを諦めたようにボーっとしている。しばらく良い奴隷はいないか見て回っていると、黒スーツの店員らしき金髪の若い男が声を掛けてきた。

「いらつしゃいませ、本日はどのような奴隷をお探しでしょうか？」
「うーん、取り敢えずこの店で扱われる中で上等なものが見たいな」
そういいながら男のポケットに宝石を滑り込ませる。他の店で貴族っぽい奴がやってて特別待遇だったのを見たのでその真似だ。

すると男は営業スマイルを心からのそれへと変え、「奥へどうぞ」と従業員用の通行口みたいな所へと入っていったので俺もその後に続く。そして進んでいった先には階段、どうやらさらに地下に降りていくらしい。それほど長くない階段を降りると、少し高級そうな木の扉が見えた。その隣には鉄製の扉もある。

「こちらの部屋にお入りください。少し時間を取らせてしまい申し

訳ありませんが、支配人を呼んでいただけますのでお待ちください」

木の扉を開き、恭しく礼をすると、彼は再び階段を上っていった。それを一瞥してから、俺は部屋の中に入る。そこは応接間、という表現が似合いそうな場所だった。対面するように大きめの黒いソファがあり、その間には綺麗な漆塗りの机が置いてある。俺はそのソファの手前のほうに座り、部屋の様子を更に眺めた。壁に掛けられた後ろを向いた女の絵に、側に飾られている裸体の女の像――誰の趣味なんだろうな。天井には上品な光を放つ丸い玉が四つほど浮いていた。人工太陽の小さいバージョンみたいな印象を受ける。他の店を覗いた時は見かけなかったので高いのかもしれない。

いやはや、早く一般常識を学びたいものだ。ものの価値がわからないというのは不利だし。まあ、金ならいくらでも創りだせるわけだが。不審に思われない程度にはものの価値を知っておいたほうが良い。

「遅くなりました。支配人のルディックというものです」

扉が数回ノックされ、先ほどとは違う男が顔を出した。余り信用できないような笑みを顔に張り付けている茶髪の男だ。若くみえるが、雰囲気はかなり場数を踏んでいるような印象を受ける。身を包む服も店員と同じようだが、生地が細かく高級品なのだろう。

「本日は来店ありがとうございます。して、どのような奴隷をお求めなのでしょうか？」

どのような……か。出来れば常識を知っている奴隷は一人欲しいんだよな。奴隷の首輪についているものを『万物改造』の能力を応用して、どんな能力があるか見てみたところ『所有者以外の着脱不可』『所有者の命令絶対遵守』というものがあるようだった。ならば俺の常識知らずを外に漏らさずにこの世界の知識を得ることが可能なはずだ。それと改造に使えるような強い奴隷が欲しい。魔物は街に入れないし、街の中で襲われたら面倒臭いのだ。よっぽどのことが無い限り逃げられるだろうが、数に押されると精神力が尽きてしまうこともある。

弱い奴隷を改造しても良いのだが、元の力が弱いのでは精神力を無駄に使うし何より時間がかかる。金は比較的楽に手に入るのだから、強いものを買っておいたほうが良い。

「知識の豊富な奴隷と、魔力の多い奴隷、純粹に強い奴隷が欲しい。容姿端麗なら尚良しだ。性別はそうだな、出来れば女が良いが特にこだわりがあるわけじゃない。それと金に糸目はつけない」

女じゃなくても良いんだ。勃たないし。悲しいかな、この身体は精通まだなんだよね。まあ女のほうが見ていて気分が良いだろうからな女が良いと言っておく。

俺の要求を聞いた男はふむと思案。持ってきていたファイルをぱらぱらと捲っていく。最初から目星は着いていたのだろう。直ぐにページを開き此方に見せてくる。

「こちらが現在商品として扱われている中で一番条件に当てはまる奴隷ですが」

ページに手を通す。……が、微妙だった。知識が豊富な奴隷と言っても一般知識が精々、魔力も一般魔術師よりちょっと強いくらい、強い奴隷も兵役経験があるだけで平凡。容姿は特徴が書いてあるだけなので良くわからないが普通以下という印象。やはり良い奴隷は直ぐに売れてしまうのだろう。勝手に地下空間を非合法の巣窟だと思っているが、奴隷自体は違法ではないのだろうし、普通に貴族とかが買いにきていたり優先して買ったりしていたなら奴隷は余り期待できない。

明らかにがっかりしていた俺の様子に気づいた男は（というか反応を予測していたかもしれない）ファイルを閉じて言葉を続ける。「ですが、オークションに出品している奴隷たちがいるんですよ。その奴隷たちには条件にピタリと当てはまるものがあると思われるんですが」

——参加しますか？

しないわけが無い。というか、それなら最初からオークションのことを教えとけよと心の中で悪態をつきながらも参加の意を伝え、

参加費用に10万ゴールドかかるというので宝石を一つだけ換金してもらった。相場より安くふんだくられた気がするが仕方ない。世間知らずのお坊ちゃんと思われるかもしれないが、特別怪しまれることもないだろう。俺は10万ゴールド払うと、再び部屋を出て隣の鉄の扉を開けた先にある階段を降っていくのであった。

そこは人々の熱狂に包まれていた。光に照らされたステージがあり、その周りを椅子に座った裕福な身なりをした人たちが弧を描くように囲んでいた。ステージ以外は暗く、人の顔の判別が難しい。その席の一つに案内され、「半刻ほどで奴隷の時間になります」とだけ告げると支配人は何処かへいつてしまった。

まあ時間まではオークションの形式でも学んでおくかと考え、俺はボーイの持ってきたジュースで口を潤しながらステージへと目を向ける。解説などをしている男が「200万ゴールドが出ました！他にはいらしゃいませんか？」などと言っているが、マイクのよくなものを使っている様子はないのに此方に聞こえるのが不思議だ。拡声魔術のようなものでもあるのだろうかと思いつつぼんやりと眺める。

オークションは特に特殊ではなかった。手をあげて出せる金額を述べるといふ単純なものだ。平気で100万ゴールドの壺とかが出ているが、ゴールドの価値がイマイチ分からない。というか、宝石足りるかな？ 一つ頭20万ゴールドはするらしいが……。まあもしもの時は改造で色々あれこれすれば何とかなるだろ。そして最後の骨董品の時間が終わったらしい。一旦ステージの光が消え、案内の声が響く。

「——さあ、次からは奴隷オークションです」

そんな声と共にステージが照らされ、そこには黒いローブを被った老人が現れた。どことなく拍子抜けしたような雰囲気会場に漂

う。俺も正直落胆した。老人の姿は、確かに若いころは美形な男であつたであろう面影はあり、白い髭に達観しているような瞳は良い老人（少し変な言い方だが）だろうとは思ふ。しかしそんな気持ちも直ぐに覆すことになった。解説の男が何やらその老人の耳元でぼそぼそと何かを囁くと、老人はやれやれといった感じに溜め息を吐き――そして“力”を解放した。

その身体を圧す何かに共鳴しているかのように、身体の中の何かがざわざわと揺らぐ感覚。俺以外の人も感じているのか、その状態の違いはあれど少し顔に動揺の色が見える。誰もが少なからずある力……うーん、魔力というやつだろうか。とすればこの身体を巡る何とも形容しがたい感覚が魔力なのか。落ち着けーと念じてみると身体のだざざわした感じは少し弱くなった。しかし完全には取り除けない。

「――では先ず最初の奴隷、エルフの魔導師『グレン・ミストレル』でございます」

そして会場全体がどよめく。「魔導師だと?」「馬鹿な」「しかもエルフ」などという言葉が会場の節々から聞こえる。何かあり得ない話ならしい。魔導師ってことはさっきの感覚が魔力確定か。そして魔力が高く、おそらく魔術とやらにも長けているであろう。

これは、買いだな。どうせエルフは長寿とかいう設定があるだろうし、老人とは言えしばらくは生きるだろう。例えば寿命ギリギリだとしても『万物改造』で何とかなるはず。

「――この奴隷はSランクの力を持ち、さらには“魔法”を宿す家系です。前回の侵略戦にて捕獲されました。隷属の首輪によって拘束されていますので反逆の心配はありません。この奴隷、先ずは1000万ゴールドから始めさせていただきます」

1100、1200、1500、2000万とどんどん根が釣り上がっていく。となればこの奴隷はとも価値があるものなのは間違いない。侵略戦とかいうものがなければ先ず手に入らない奴隷なのだろう。俺はとても良い時期に転生したものだのと、自分の幸運

に感謝する。そして奴隷を落とすために手を上げ、金額を宣言した。

06 | 初めての奴隷（後書き）

— 08 / 21 / SUN / 27 : 03

小説は書き上がった。あとは新規小説投稿をした後、誤字脱字の確認をして次話投稿するだけである。結局、日曜には投稿出来なかったが——まあ、概ね日曜だし上々だ。僕にしては頑張ったと言っ
て良いだろう。火曜日からは集中講義で時間が取れないし、今日完成して良かった。出来はまあ……気にしないことにしよう。僕は疲れた身体で伸びをした。

そういえば、最近収集していて猫画像がかなり溜まっていたな。iPod touchに同期してしまおう。iTuneを起動し、iPod touchとの同期を開始する。どうやら少し時間がかかるようなので、友達から買ったPCゲームのインストールもしてしまうことにしよう。パッケージから取り出したディスクをPCに入れ、読み込み音と共にデスクトップに現れるメニューからインストールを開始——しようとしたのだ。それから、僕が絶望したのは

最初は、なんかインストールの%増えてないな、そんなことを思っていた。この時僕はネットサーフィンをしていたのだが、次の瞬間にブラウザが固まった。またフリーズか、わりと良くあるんだよねとまた動くまで待つ。だが、一向に動く気配を見せず。仕方ないから閉じようとしても、タスクマネージャーで閉じようとしても、消えず固まったままだ。この時点で嫌な予感しかしなかった。

五年近く前のノートパソコンである。丁寧とは言えない使い方をしてきたので、こんな症状になるのは一度や二度じゃない。そして症状の結末は強制終了しか手はないという事実。もう、乾いた笑みを浮かべるしかなかった。今思えば一気に書いたため途中経過を一度も保存せず、また完成しても直ぐにアップするからと保存しなかったのは落ち度だ。

奇跡なんて起こる筈もなく、強制終了という最悪にして最終の手

段に頼るしかなく、再起動して現れたテキストファイルの——真っ白な画面にもはや絶望すら振り切ってしまった。圧倒的な虚無感、脱力感、書いている時は体中に満ちていたやる気が綺麗になくなってしまい、今から書き直す気になんかなれずに不貞寝した。

——それから

月曜日は一日教習に追われ、火曜日から金曜までは集中講義で朝から夕まで暇はない。帰っても疲れて翌日まで寝てしまった。そして土曜は自動車教習——しかも、高速道路だ。神が試練でも課しているとでも言うのだろうか。しかし何とか今日更新することが出来る。これほど嬉しいことはない。僕は投稿実行をクリックした——。

そんなわけで更新が遅れましたよという言い訳。集中講義期間寝なけりや出来たとは思うんですけどね。無理でした。一度消えたせいで地下への道を大幅に省略しちゃいました。早く更新したくて描写がいつも以上に薄い気がします。勘弁してください。

そして最初の奴隷に老人。いやあ最初は僕も金髪美少女にしようかなーっと思ってた。実際最初はそうしたんですが、データ飛んで書き直したら何故かエルフの老人に……不思議な話ですね。

後書きが毎回長い作者ですけど、今回は異常な長さになってしまいました。フラストレーションが溜まってたのでつい。次話からは少し控え目になります。

誤字脱字矛盾等ありましたら報告お願いします。

次こそ早く更新したい……。

07 | 奴隷強奪作戦「1」(前書き)

つい出来心で。

少しテイストが違うかもしれません。

更新遅滞の理由は後書きにて。

07 | 奴隷強奪作戦「1」

落札成功、やったね。仮落札ということで木で出来た札を渡された。そこにサインをしたのだが、どうも特殊な木で出来たこの札にサインすることによって持ち主のものだと魔術で証明できるとかなんとか。ちなみに名前なんてこの世界では無かったので前世の名前を書いた所、発光したのでどうも成功したらしい。どんな仕組みなのかよくわからないし、聞いてみてもわからないそうなので（建前じゃなければ）、もう失われた技術だけど製造だけは出来るとかそんなあれじゃないだろうか、俺は推測してみた。

そのやり取りは直ぐに終わり、次の奴隷の紹介が始まるようだ。再び照明が消え、また点く。そしてステージの上には美少女。輝かぬばかりの金色の髪の毛、透き通るような翠の瞳、まだ幼い身体はしかし女を感じさせる身体へと成長する途中のようだ。純粹で素直であろうことがわかる雰囲気を感じている——エルフだった。白いワンピースというシンプルな服装がその美しさをさらに駆り立てている。ひゃっほう、美少女万歳。思わず顔が緩みそうになるか何とか抑えた。

「——この奴隷は、先ほどのエルフの魔導師の孫の『ティナリア』ミストレル』でございます。まだ魔術こそ未熟ですが、魔法を受け継ぎ、また膨大な魔力を持ちます。さらにはエルフの中でも整った容姿……、そして処女。ここだけの話ですが彼女はエルフの貴族なのです。今の侵略戦が終わればもう手に入らないでしょう——さてこの奴隷、2000万ゴールドから」

先ほどよりも高いが、直ぐにその五倍の値段がついた。というか、3000万4000万ときて一億だった。怒涛の勢い過ぎる。ちょっと宝石が足りない気もするが、逃すのは惜しいな。まあちよつと外に出て石でも何でも拾うなり買うなりすれば増やせるから心配はいらないし、そして何より祖父と孫は一緒に買ったほうが良い気が

する。色々得しそうな予感がする。でも正直面倒臭い。凄く面倒臭い。

さっきの老エルフに続いてこの美少女エルフを買ったとなると流石に目をつけられるだろう。この会場は落札した人に被害が起きるのを防ぐため人の顔が覚えづらくなる魔術的なものが常時発動していると今さっき聞いたが、印象は残る。老エルフだけならまだしも美少女エルフまで落札してしまったとなると目をつけられてしまうだろう。会場を出た途端に襲われる可能性が出てくる。仮に金目当てにしる奴隷の強奪にしる、老エルフの戦闘能力がどの程度がわかっていない今、防げるかはわからない。

うん、ならもうあれだ。美少女エルフを落札する事は諦めてしまおう。もちろんそれは手に入れるのを諦めるというわけではない。美少女エルフを落札する場合、おそらく魔力の高さから戦闘にも使えるかもしれないが、その多くが愛玩用だろう。テンプレ的に考えて、きつと太った腹をした汗臭い汚職とかしてそんな貴族が落札する筈だ。それを改造して強化した老エルフに命じて強奪するという方向にしよう。老エルフの戦闘力が足りなくても改造した武器とか使えば襲撃いけるんじゃないかな。改造にどれだけ時間がかかるかわからないし、その間に純潔散らされるかもしれないけど。もつと良い方法あるかもしれないけど思いつかないし、純潔とかが必要なら改造でどーにかするしどーでもいいや。

俺は考えを纏めると、ボーイを呼んでオークションの会場から退出することにした。後ろではまだ美少女エルフへの入札が続けられていた。

「というわけで今日から俺が御主人様だ」

ちよっと偉そうに言ってみた。今俺の前に跪いているのは、エル

フの魔導師『グレン』ミストレル』である。何とも言えない充足感がある。美少女じゃないのが残念だが老人とも言えども人が自分に跪いているというのはこう、気持ち良い。罪悪感のようなものも感じるけど、快感のほう大きい。老人でこれなら美少女ならどれほどだろうかと、今から楽しみである。

あの後、血液による契約を行うことで老エルフ——グレンは俺だけの奴隷となった。俺が死んだら死ぬし、俺の明確な意思（催眠状態では不可）で譲渡しないと他人には渡せないらしい。そんな説明を受けてからはいい加減地下にいるのも気が滅入るので、直ぐに入ってきたところから地上へと出た。新鮮な空気に生き返ったような心地がしたものだ。地下の空気は湿ってていかな。そんなこんなで適当な宿とって、狭い部屋の簡素なベッドに寝っ転がって、なんとなく跪かせたグレンに今の言葉を言って今に至る。うーん、こうやって思い返してみると自由に生きてるな俺。

ともかく晴れて手下を手に入れたのだが、どうしたものか。さっき言った俺の言葉にもこの老いばれは反応みせねーし。

「……^{マスター}御主人、一つ聞きたいのだが良いだろうか？」

「んー？ うーん、うんいいよ」

何か反応見せた。言葉づかいがやや気になる所だが仕方ない。俺を主だと考えているならどーでも良いことだ。最悪改造して性格改造とかも出来そうだしね。

「私の孫を、なんとかしてあの貴族から取り返してはくれないだろうか？」

元よりそのつもりだったが、よもやグレンのほうからそれを言うてくるとは。いや、予測は出来たか。祖父と孫の関係みたいだし。ま、そのほうが都合が良いんだけどね。しかし気になること言っつんなこいつ。

「“あの”貴族って、どんな貴族が落札したか知っているの？ オークシヨンの終わる前に会場を出た筈なのに」

「魔力解放の許可が出た時、会場全体に私の魔力をまき散らしたの

だ。それによって会場に起こったことは把握している」

流石は魔導師といったところか、魔力だけでそんな芸当が出来るのか……なんて、俺には凄いかどうかわかんないけどな。——どうも、奴隷を買ったり城下町の女を攫ったりと好き勝手している一番評判の悪い貴族が買ったらしい。グレンとしては最悪の状況だという。何でも、エルフというのは純潔を捧げた相手に全てを捧げるという呪いが生まれながらにしてかかる種族らしく、それは本来自分から捧げないと効果をなさないのだが、首輪による強制力では自分から捧げたことになってしまふとの事。だから美少女エルフ（ティナリアだっけ）を早く貴族から奪い取ってくれとのことらしい。

正直、へーって感じた。おそらく『万物改造』で呪いは解けるだろうし、男と交わってるくらいで奴隷としての利用価値がさがるわけじゃない。だからここで俺がわざわざ頼みを聞いてやる意味はないのだが、『万物改造』をグレンに使う以上、条件を付けければ悪い話ではない。どうも首輪による強制は精神の面までは及ばないようなのだ。なので精神的な抵抗を限りなく抑えてもらえたら、精神力の少ない消費でグレン本体の改造ができる。損は無い。もっとも、俺が奪っても最悪な状況なのは変わらないだろうけども頼んでくるということは、何か出しぬく方法があるのかもしれないけど……ここは引き受けるべきだな。

「別に構わないが、条件がある」

「条件とは？」

「いや、特に難しいことじゃない」

グレンの皺だらけの額に右手を当てる。自分の体内に満ちる精神力を巡らせ、右手からグレンの身体へと流していく。まずは表面だけを覆うように纏わせていく。何か違和感があるのか、少しグレンが戸惑っているようだ。

「——これから良いと言う迄、肉体的精神的に一切の抵抗をするな」

『万物改造』発動、精神力が変質しグレンという固体の情報を俺にわかるようにデータ化しまとめて改造準備の段階へと存在を曖昧

にしてい。俺の時は特に感じなかったけど、やはり存在に干渉されるということは精神的にも肉体的にも厳しいらしい。グレンは呻き声と共に部屋の床に倒れこんだ。別に首輪への命令ではなかったのに、苦しい声を出しながらも抵抗しようとさえしないようだ。流石と言うか何と言うか……。

「じ……、御主……人」

「はははは、死にはしない死にはしない」

勿論、死ななければ良いという問題じゃないんだろうけどさ。俺が止める気が無いのがわかったのか、グレンはガクリと諦めたように頷垂れた。ごめんごめん、強く改造してあげるから許して欲しい。頭の中に浮かび上がるグレンという存在情報、比較対象が自分しかないからよくわからないが魔力は俺に劣っているものの、運動能力などその他色々がとんでもなく高い気がする。最低俺の10倍はある。老いたようにしか見えない身体だが、弛みなど一切なく鍛えぬかれている。改造の素体としては申し分ないだろう。

そして一般的にはかなり高いであろう魔力、これが思ったより良い影響を及ぼした。俺の精神力と混じり合うことで『万物改造』の補助を可能とするらしいのだ。やはり、魔力というものはあったほうが良いようだ。これならばある程度は好き勝手に改造できるだろう。——さあて、どんな改造をしようかな。

「ぐふ、良いものを買った」

脂ぎった顔に、太った腹、醜い顔に禿げかけた頭、着ているものは立派な装飾のしてあるもので、貴族か商人であると思われる。し

かし胸元についた勲章が彼を貴族であると示していた。馬車の中で彼は酷くご機嫌な顔をしていた。というのも、美少女なエルフが手に入ったからである。落札してからも地下街の娼館で女を抱いていたため、すっかり遅くなってしまったのだが、家に帰ればエルフを抱ける、彼は自分の横に座らせた金髪のエルフを見ながら顔を醜く歪めて笑う。

当然エルフの少女はその端正な顔を怯えるようなそれに変えるのだが、男はそれさえも娯楽であるのか笑みを深くする。男の我慢は限界であった。もともと、男は昔から欲望には素直だったのだ。王家に古くから仕える家系であったため、兄が継いだ今は好き勝手にできるし、また幼いころから欲しいものはすぐに手に入れられたし、どんな所で狼藉を働いたところで全てともみ消してきた。そんな彼だ。涙さえ浮かべる少女により一層の劣情を催し、もう馬車で致してしまおうかと考えてしまった。

男は少女の膨らみかけの胸へと手を伸ばす。誰にも触られたことのなかった胸を服の上からとはいえ触られた少女は、「ひっ」と声をあげ抵抗しようと男の手を押しつけるが、男が一言「手の力を抜き受け入れろ」と命令すると、手に力が入らなくなり手の侵入を許してしまう。簡素な白いワンピースしか着けていない彼女は、手の感触の気持ち悪さに泣き出した。薄い生地のため、男の手に合わせ形が変わる。

ある程度服の上から堪能した男は、ワンピースの両肩部分を掴み、一気にずり落とした。現れる素肌。膨らみかけながらも女性らしさの出始める乳房、まるで雪のように白い肌に二つの桜色。もう男が止まることはないように思えた。鼻息を荒くし、両手で乳房を弄ぶ女は「いやっ」と声をあげて身を振り男の手から逃げようとするが、馬車の中では逃げられよう筈がない。寧ろその抵抗にますます興奮する男はその桜色の突起にしゃぶりつこうと顔を近づける——男の唇が今まさに少女のそれに触れようとする時——轟音と共に馬車が大きく揺れた。

「――魔導師『グレン』ミストレル、推して参いる!」

そして横倒しになった馬車の前に、漆黒の鎧が砂煙を立てて着地した。

07 | 奴隷強奪作戦「1」（後書き）

集中講義が一日。

集中講義の合宿三日間。

現在実習中（今週末迄）

以上の理由で中々更新できませんでした。

まあ自己満足で書いてるし謝ると逆にナルシストみたいですけど、読者の皆様には謝ります。ごめんなさい。

そして今回やけにテイストが変わりました。

主人公に関してはもはや性格が変わっているような………書きを書いてるうちに修正していききたいです。

あと最後ら辺の表現、まあ駄目だったら修正します。

深夜のテンションでつい。明日は八時から実習があるってのに……。

そんなこんなで駄目な作者ですが、執筆をやめてエターナることはないと思われます。仮に更新停止するにしても、その時は事前にお知らせしますので。最後までお付き合いいただけると幸いです。

08 | 奴隷強奪作戦「2」(前書き)

作者はノリノリだった——その結果がこれだよ!!

08 | 奴隸強奪作戦「2」

——つい悪のりしてしまった。今は反省をしていなくもない。

グレンの改造を終えた俺が抱いた感想はそれだった。彼は今、この簡素な部屋に似合わぬ重厚なくらい鎧を纏って戸惑ったように手を動かしてみたりと自身の身体を確認している。その姿はさながら暗黒の騎士、全身が洗練された鎧によるフルアーマー、デザインは非常にシンプルなのにとってもない存在感がある。夜を思わせる漆黒は、見ている者を虜にするかのように深く、美しい。

そして何よりもこの鎧の真価は、魔力でできていることなのだ。実際魔力の物質化というのが可能かどうかは知らなかったが、ノリでやったら出来たから多分可能なんだろう。そして、変身能力を与えてみた。この変身能力と鎧はセットで、腰に手を当てて「変身」と言うと脳みそに仕込んだ魔力変換機構が起動して、事前にインプットしておいた鎧を魔力で編み出すというものだ。やっぱり変身は浪漫である。戦隊ものやライダー、光の巨人とかが子供のみならず大人にも人気なのを見るに、自分とは違う何かになりたいという願望は根本にあるんじゃないかと思う。変身願望が異世界人、しかもエルフにあるかはわからないけどね。

「御主人^{マスター}、一体何を……？」

「さあ？ 魔力の物質化的な？」

「そうか……」

怪訝な目を向けながらも反論をすることはなかった。精神的な改造は何故か消費が激しかったから余りしていないのだが……まあ改造しちやっても個性が俺の好みで一定になっちゃってつまらないしな。現時点で俺に友好的とは言えないけど、奴隸の首輪がある限りは命令に逆らえないのだから改造の必要ないだろう。でも一人ぐらい絶対に従順な手下とか欲しい。

「ああ、あとその使い方は頭にインプットしてみたけど分かる？」
「わかる。が、私の場合魔力障壁があるのでこのような鎧は不要と思われるのだが……そして鎧展開による魔力増強があるとはいえ、展開していない時に全力を出せないというのは弱くなるのではないだろうか？」

知らんけど、魔導師は魔法障壁を張れるらしい。聞いてみたら、かなり難度の高い魔力操作の極みならしい。漆黒の鎧（仮）は、その性質上殆どオートで魔力の鎧を編み出すわけだが、魔導師にとつては余り使い勝手が良くないとかなんとか。それに加え、変身していない時は魔力抑制を行い、その魔力を貯めることで変身している時に魔力ブーストするのだが、それも不満ならしい。常に変身するというわけにもいかず、変身という動作を挟むことで隙が生まれるのでは？

等という現実的な欠点を指摘してきやがった。確かに事実だろう。しかし変身は浪漫だ。それが例え魔力の鎧展開というものでも、自分という存在を隠す仮面をつける。格好良いじゃないか。それに加え、ダークヒーローを彷彿とさせる漆黒の鎧。それに隠された数々のギミック。心がくすぐられる。しかし残念ながら色々と枯れ果てた老人には理解されなかったようだ。もしかしたら魔術行使よりも、鎧による身体能力向上を行い肉弾戦をするように仕向けたのがいけなかったのかもしれない。やっぱり変身したら肉弾戦を主に行うべきだろ派なので、鎧には装着者に武術的なものを使えるよう本人の意思に関係なく補助するような役割を付けてしまったので、それが魔導師の気に触ったのかも……まあいいや、考えたところで今更やり直すという選択肢はないし。

「——む」

そんな結論に至った所で、グレンが何かに気づいたような声を出した。その一言で何処となく緊張した空気が漂う。

「御主人、申し訳ないが孫が危ないようだ。——魔力制御脚部解放」
マスター
オーバーロード
文句を言っていたわりには、流石魔導師と言ったところか。何気

に使いこなしている様子で鎧による限定解除——つまりところ脚部の超強化——を行い、凄まじい速さで窓ガラスを突き破って部屋を飛び出していった。えー、何あの奴隷自由過ぎるんじゃないかな……待てよ、あの鎧に何か精神高揚的な効果のある改造もしたような気が。そうか、自業自得か。

というか先ず鎧に広範囲サーチ機能とかつけたのが原因か……次からは悪ノリで改造するのはやめよう。俺は自らの失態を反省しながらも、監視のためにつけておいた視界聴覚同調システムを起動する。一瞬俺の視界が歪むと、街の外の草原が見えた。グレンの孫を買った貴族が、自分の領地にでも帰ろうとしているのかもしれない。凄まじい速度で変わる風景にそろそろ飽きた頃、周りをいくつかの簡素な馬車が囲む金色（純金？）の装飾がされた二頭の馬が引く貴族が乗っていると思われる馬車が現れた。周りのは護衛か何かなのか。ともかくその馬車の一行に追いつくくらいまで迫ると、グレンはその速度のまま空に飛び上った。そして今度は魔力を右足に溜めて——うねり狂い風を穿つ一本の黒い槍となった彼は貴族の馬車をぶち破った。お前、孫の無事考えてんのか、そう俺が思ったのも無理はないだろう。

「——魔導師『グレン』ミストレル、推して参いる！！」

そんな宣言をしながら彼が地面に降り立ったのを見て、俺は思わず溜め息を吐いた。そして叫ぶ。

「変身は正体を隠すためだよっ！？」

そんな俺の叫びが聞こえる筈もなく、漆黒の騎士による貴族御一行の殲滅が始まったのであった。

正直最初は不満があったものの、いざ戦闘を行うと存外使える鎧だな。魔導師『グレン』ミストレル』は十を超える貴族の護衛たちを相手取りながら思考する。自分を買った男が、何やら不可思議な力で植え付けた変身能力。自身の魔導師としての戦闘スタイルを根っこから否定するような戦いを強制する嫌な装備であると、彼はそう考えていたのだが、いざ戦闘となると意外なほど自分に合っていた。

本来後衛としての戦い方が多く、物理と魔法の両方に効果のある魔法障壁があるとはいえ、数に押される場合苦手であった近接戦闘も、いまや肉弾戦のみで圧倒している。剣を持って襲いかかる、鋼鉄フルアーマーの護衛たちを、いなし、叩き、投げ、潰す。これらの動作は鎧が制御してくれるため、その間に詠唱を唱えることさえ可能だった。鎧が前衛、自分が後衛と、一人にしてパーティーを組んだ時のような強さを発揮できる。その事実が衝撃的であった。（しかし……数が多い）

肉弾戦と魔法を駆使し、着実に相手の数を減らしているが殺さない程度に手加減しているのが裏目に出たのか、足止めされている。敵を殺さない、彼はいつからかそんな信条を持っていた。大切な孫を助ける時であっても、雇われているだけの護衛を殺せない。この甘さこそが、彼と孫が奴隷として囚われてしまう原因となったのだが、直ぐに信条を変えろというわけにはいかなかった。寿命の永いエルフだ。人の寿命など遥かに超える時間を、不殺を貫いた彼にとってもうそれは染み着いて離れない甘さだった。

殺さないように、魔法で足を狙う。しかし足に負った傷くらいでは、直ぐに何もなかったかのように立ち向かってくる。どうやら護衛の中に、実力者の治癒術師がいるのだろう。彼はそう予測し、次は耳に集中した。そして敵の一人を炎の魔術で焼く、火の玉に包ま

れた護衛は叫び声を上げた。フルアーマーなので中は酷い暑さになるのだらう。草原にも火が燃え移ったが、火に込めた魔力を散らし消化した。そして彼の耳に、詠唱が届く。その詠唱が完成し、魔術が発動したのを確認すると、彼はその声の元へと駆けた。

一見して、普通の護衛。擬態していたのだらう。魔術師という存在は敵対するものにとつての脅威だ。そのため、その存在を隠すというの一般的な戦術であった。鎧に包まれた膝を魔術師の腹に叩きこむ。コヒュツ、という息を詰まらせる音がして、魔術師は地面に倒れた。これでもう敵の戦力は回復しない。——程無くして、貴族の護衛は全て意識を刈り取られた。

草原は夕闇に包まれる。沈んでいく太陽に照らされ、橙色の空の下で漆黒の騎士は無様に怯える貴族へと足を進めた。

「ひつ、ば、化け物！？ く、くるな、こいつがどうなっても良いのか？」

その恐ろしさに顔を青くしながらも、護身用のナイフをエルフの少女の首元へと近づける。服を降ろされたまま、未だ素肌を晒す少女は涙目のまま呆然としていた。短い間に色々と起こりすぎて脳が麻痺しているのかもしれない。そして、そんな少女の——自分の孫の姿を見たグレンがどう思つかは想像に容易いことだ。

絶大な魔力が立ち上る。鎧により近接戦闘も可能としているとはいえ、彼の本質は魔導師だ。魔術を使い、精霊を使役し。魔法を使い、空を支配する魔導師。天を貫く魔力は、空の色を鎧と同じ黒に染めていく。そして時期にゴロゴロと音が鳴り始め、雲が紫電を帯び始めた。不殺、それが彼の信条。鎧に感情を高揚させられて尚、護衛は殺さなかった。普段のグレンであれば、例え今の状況であろうと殺さない。彼はそんな人間だった。

しかし、彼は“魔法”を放つために魔力を完全開放した。そして今、彼の魔力と鎧は同一なものだ。彼の魔力が解放されたなら、鎧の力も最大限に発揮される。つまり、更なる感情高揚。理性を失いかねない精神高揚。彼はその中で理性を保ちながらも、出来たのは

自分の娘を対象から外すということだけ。魔力の柱を黒い空が全て吸収し、魔法の準備は完了した。

「——継承魔法『神鳴り』、発動」

静かに告げられた言葉。それと同時に空が真っ白に染まり——天から堕ちる雷撃が、貴族の身体を正確に穿った。その道筋には何人たちとも、万物の存在を許さない伝説をもつ雷。伝説の通り、貴族の姿は塵一つ残さず消え去り、草原には高熱で融けて変質した穴が生まれた。未だ融解しているその穴の横で、黒い魔力によって守られている少女が気を失っている。その他には、気絶していた筈の護衛たちの姿も、馬車の姿も、馬たちの影すら残されていない。全て雷が、魔法が消し去ってしまった。

パキンッ、という小さな音と共にグレンを包む鎧は砕け散る。構成に使われた魔力は全て宙に消え、後には呆然と立ち尽くすエルフの老人の姿しかなかった。その瞳には、後悔と、怒りしかない。自制できない自分が許せなくて、また鎧を与えたあの男を恨んだ。結果として彼の孫は助かった。しかしこれは余りにも、余りにもむご過ぎる。

改造はわざとではないかもしれない。与えられた力に酔っていた自分がいたのも確かだ。魔法を発動しようとしなければ、こんな事にはならなかっただろう。彼はそう頭では理解しながらも、納得できなかった。自分の主人への怒りと恨みを拭い去ることは出来なかった。

この日この時この出来事が、のちの物語に大きな大きな変革を生むことを……まだ誰も知らない。

08 | 奴隸強奪作戦「2」(後書き)

すみません、最近仮面ライダー龍騎のフィギュアアーツ買った事とか色々あつて悪ノリしました。

某アニメ最新話みた後のテンションで書いた。
若干プロット狂った。

反省はしているが、後悔なんてあるわけない。

読者置いてけぼりー、な予感。

何かわからなかったら何かしらの方法で伝えてくださると幸いです。

誤字脱字矛盾等々、ありましたらご指摘いただけると幸いです。

09 | 奴隸奪還作戦「3」（前書き）

今話書くに辺り矛盾がうまれてしまったので、第06部の首輪についている概念の説明の『所有者への危害意志に反応した電気ショック』を削除しました。

少し前話の最後訂正しました。

ちよつと文章がしつこいかもしれないです。

09 | 奴隷奪還作戦「3」

「すまなかつたな御主人」^{マスター}

鎧が解除されたので視界ジャック出来なくて暇してたのだが、無事帰ってきたらしい。黒ローブに隠れるように、白いワンピースの少女が見えた。どうも怯えているらしい、目も合わせてくれない。金色の髪だけが見え隠れしていて顔は見えなかった。

しかし可笑しいな、あの貴族とは既に主従契約をしていた筈だ。そして確かに貴族は死んだ。だとしたらその奴隷であるティナリアも死ぬ筈なんだが……、そう言えば雷が落ちた時魔力に包まれていたな。それが関係あるのか？ 仮に主従契約による死の共有を断ち切る秘策があるなら——それはとても不味いような、気がする。

「予測はついたか……子供ながらに聡明と言える。確かに今御主人^{マスター}が考えている通り、主人の死によるペナルティーを回避する術を私は持っている。それに、少しばかりなら命令に抗う術もある」

グレンの言葉に、嫌な予感が当たったようで俺は溜め息を吐いた。それならば強者に対しての首輪はさしたる意味を持たない。命令は言葉にしなくてはならない。その間に殺されてしまえばそれまでだし、それに加えて命令に少しとはいえ抗う術があるときだ。前者は貴族で事実とわかつているし、後者がブラフだとしてもそれを確認する方法は無い。『万物改造』ならある程度は時間を稼げるが、あのデタラメな魔法を使われたら一溜まりも無い。現状、グレンが俺を殺そうとしたら防げない。

「それで？ 要求を言つてよ」

「そこまで理解しているのなら話は早い。私の奴隷からの解放……そして出来るなら孫の首輪を外して欲しい」

それも予測していた。死によるペナルティーが防がれてしまうのであれば、現時点で能力を駆使しても勝てないのだから大人しく従うという選択肢しか俺には残されていない。せつかく奴隷を買ったに

酷い展開だよ。もっと良い結果を出す方法があつたかもしれないが、少なくとも俺には思いつかなかった。

「仮に断つたら？」

「既に不殺誓いは破つた。一人増えたところで違いはない」

小さく聞こえる「変身」という呟き。噴き出した魔力が形を成し、漆黒の鎧が形成される。そして鎧の機能の一つ、武器形成により魔力を剣の形へと物質化して俺の首元に突き付ける。うへえ、マジで怖いわー。顔は見えないけど雰囲気の本気だと言っているよこの人しかし不殺の誓いなんてしてたのか、こんな状況でなければ笑っていたが今はそんな余裕はない。剣が徐々に近づき、首筋を血が伝つた。

「……わかつた」

能力を限界まで行使すれば隙について何とかできるかもしれないが、正直この状況で何かする度胸は今の俺にはなかった。いちおう便利な能力もっているのと、実験体故か生前よりも精神の揺れ幅が小さくなっているというのがあり、比較的異世界に生きることには抵抗を感じなくなっているが、こう実際に死を感じさせる出来事を前にすると何も出来ない。だって元現代日本人だから——というのは言い訳か。所詮、俺が臆病なだけだ。

「では私の奴隷契約の解除を」

「はいはい、『私は奴隷の所有権を解除する』」

明確な意思を持って告げると、パキンと何かが割れる音がした。グレンが顔の部分の鎧だけ解除すると真つ二つになった首輪が転がり落ちる。ああ勿体無い、首輪は使い捨てなのか。魔術的な術式ならば『万物改造』で再現できそうだけどなー。『万物改造』による洗脳のほうが確かな配下を作る方法ではあるが、俺としては首輪のほうが本人の意識がしっかりと残るので好みだ。

「それで、娘のほうは？」

どちらかというところが本題なのだろう。顔が真剣に見える。ふむ、俺が魔力の物質化云々をしたせいで高位の魔術師とも思っ

ているのだろうか。望みは薄いが出来るならつてところかな。さてどうしよう。おそらく俺の能力を使えば首輪を外すことは可能なんだが……うん、これは使える。

「無理だよ」

「そうか……」

残念そうだが、やはり最初から大した期待はしていなかったのか落胆は少ない。

「でも持ち主が死んでるんだし、問題はないんじゃない？」

持ち主の音声に含まれる微量の魔力とかに反応するとか何とか。とすれば持ち主の貴族が死んでいるのだから首輪が外れない以外は……いや首輪が問題なのか。奴隷ってだけで酷い扱い受けたりするのもかも、個人的に金髪美少女に首輪とか良いと思うんだけど。それは置いておいて、エルフ族は高潔で一度でも人の奴隷に落ちたら追放とか、そんな掟があるとすれば首輪を外したがる気持ちもわかるが。

「……再契約される恐れがあるのだ。まあ出来ぬのなら仕方あるまい」

「いや、まあ実は首輪を外すことくらいは道具さえ揃えば出来なくもないよ」

「本当かッ!？」

思い切り肩を掴まれ揺らされる。痛い痛いって、やめるくら。気持ちはわかるが落ち着いて欲しいもんだ。そう思いながらも口には出さないことにする。顔が必死すぎて気持ち悪い。

でもなんだろう、再契約って。血による魔力の同調が契約なわけだし、それに上書きする方法でもあるのか？　しかしそれならば自分が再契約して破棄すれば良いと思うが……色々思うことはあったが平静を装って答える。

「本当だよ、道具揃えるのは結構大変だろうけどさ」

嘘だけど、本当はたぶん所有者情動的なのを改変してしまえば容易に首輪なんぞ外してしまえると思う。嘘も方便なんて言うし、利

用させてもらうぞ。手間暇かけて手に入れたんだ。ただで解放はしない。というか解放したくない。

「ならば直ぐに道具とやらを用意してもらおうか」

「あはは、そんな簡単に用意できるもんじゃないって。帝国では手に入らないものなんだ。王国に行くしかないね」

知らないけど。何かあるだろうせ王国じゃないと手に入らないものな何か。あるといいな。ともあれ俺の言葉にグレンは少し悩んでいるようだ。確かに俺の言葉は信用できるかはわからないし、下手すると隙を突かれて孫と再契約されて逃げられるかもしれない。みたいな事を考えてるんじゃないかなー、わからないけど。俺はそんなことしないというのに、首輪の契約なんて確実性のないものなんてに頼りませんで。先ず再契約の仕方わからないし。

「なら、王国についてきてもらおう。そこで道具とやらを見付け次第、孫の首輪を外してもらうぞ」

「了解だよ」

どうせ帝国にはいられないし、元より逃げるつもりだった。強力な護衛付きでいけると思えば、オークションで使った金と時間なんて安いもんだ。いつの間にやら主従関係が逆になってることに気付いたが、まあ仕方ない。世界を生きたためには時に下手に出たほうが良い時もあるのさ。何も知らない俺が先導して王国に行くより、常識を知ったエルフに着いて行くほうが行きやすい筈。帝国だけじゃなく王国もエルフと対立していたらどうなるかわからないが、まあなるようになれだ。それと旅の途中で『万物改造』での奴隷化が出来るかどうか試してみることしよう。

そんなこんなで、俺と老エルフと美少女エルフは一時的な協力関係（まあ俺が下っぱいけど）となり、王国へと旅立つのだった。

と思ったら武器とか食料とかを購入するらしい。国を渡るのであ

れば1〜3ヶ月分の物資は必要なんだとか。当たり前か、俺の思慮が足りなかったな。まあ修学旅行以外旅すらしたことのない元現代日本人の俺が、手際良く準備出来るほうが可笑しな話か。

「でも俺が金を払うのは可笑しくない？」

いちおう建前は仕方なく王国まで着いて行くだけだというのに、どうも俺が全部金を払うらしい。奴隷なわけだし金がないのはわかるのだが、微妙に納得がいかない話だ。『万物改造』という錬金術でいくらでもお金は創りだせるから問題はないのだけれど。そんなこんなでいくらかの金を二人に持たせておいた。一人一人その範囲内で買物をしている。

「ふむ、人間の店にしては良い杖を置いているな」

魔術媒体物色中のエルフは俺の話を無視するようだ。酷い奴め。なんとなくふてくされた気分になりながらも、俺も店内を物色することにする。大理石のような床に、一つ一つ丁寧にガラスのショーケースの中に武器が入っている武器屋。帝国王都で1、2を争うほど有名ならしい。地下街にも武器は売っていたけど、余り良いものは無かった。やはり非合法的なものが地下なのか？　だがこの店にくる途中奴隷の首輪をつけてる人が普通にいたから奴隷は結局合法なんだろうし……うーん、アウトレットみたいに訳有り品とかが地下なんだろうか。いくら考えても明確な答えは人に聞かなきゃわからないのだから、俺もいい加減物色を始めることにする。

正直ものの良し悪しはわからない。直接さわれば能力の応用で確認可能なのだが、手に取るには店員の許可が必要で面倒臭い。取り敢えず店に飾ってある中で高いのから見えていくが何と無く、RPGを思わせる効果のことが多い。筋力増強、治癒力向上、火属性耐性・強化等、基本的に自分の魔力によって仕込んである魔術式を起動させて効果を得るというものらしいが、中には大気から魔力を集めて自動で発動するものまである。中には知力増強なんてものまであるが、頭が良くなるのだろうか、気になるところである。知力増強の武器は薄ら青い小ぶりなダガーで、何か文字が刻んである見た目は

格好良いし買ってみようかな。俺は店員を呼んで早速買ってみた。

「ふん、見る目はあるようだな」

ダガーを受け取って懷に仕舞おうとしたところでグレンが来た。この老いぼれ偉そうである。変装の為にローブで耳を隠しているとただの老人しか見えず、偉そうにされるとムカつく。というか、見る目云々じゃなくて適当に買ってみただけです。まあそんなことわざわざ説明しないけど。

「まあね、そっちは何を買ったの？」

「この杖と……この弓矢だ」

グレンが取り出した杖は、白い枝に青い宝石のついたものだった。良く分らないけど宝石から魔力を感じるので何か強いんだろう。そして弓矢、これはグレンの後ろに隠れているティナリアが持っているのだが、銀で出来たシンプルなものだ。魔力は感じないが、銀は退魔の力があるとかいう話を良く聞くから、そういう類の特性でもあるのかもしれない。

しかしこの娘、いい加減話してくれないものか。どうも貴族に襲われたせい、或いは人間を嫌っているのか知らないが、一言も話してくれずいつもグレンの後ろに隠れている。耳を隠すための布のせいで顔も良く見えないし……美少女がいるのに話せないのはもどかしいわ。話題もないけど。

「で、武器も揃ったし次はどうする？」

「食料だな、馬車も欲しい所だが金はあるか？」

そう言いながら手に持った武器を宙に浮く変な切れ目に入れるグレン。なんだその便利そうな魔術は。聞いてみた所、空間魔術なる高位魔術らしい。魔力を使って亜空間に繋げてそこに保管するんだとか、そしてその亜空間は人の魔力総量によって決まるらしい。素晴らしく使い勝手が良く、尚且つ俺の琴線に触れるものだったので教えてもらおうとしたけど、教えてくれなかった。食料はそこにに入れてくれるのかと聞いたら鼻で笑って「私と孫の分はな」と言った。死ねば良いのに。後で解析して絶対使えるようになってやる。

武器屋を後にした俺とエルフ・sは食料を買い込み（本当に俺の分だけ亜空間を使わせてくれなかった）、服も買い、最後に二頭の馬と馬車を購入して夜が明ける前に王都を発った。

09 | 奴隸奪還作戦「3」（後書き）

最近週一くらいの更新になってしまっている。そして一日で全部書いているせいか、文章がなんとも勢いに、重複表現同語連用ご容赦を。

最近つくづく長編書くのは難しいなと実感。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6274v/>

彼の使命は異世界征服

2011年9月24日10時27分発行